

# 矢部川水系河川整備基本方針

矢部川水系の流域及び河川の概要  
(案)

平成 26 年 3 月 26 日

国土交通省 水管理・国土保全局



# 目 次

第1章 流域の自然条件	1-1
1-1 河川・流域の概要	1-1
1-2 地形	1-3
1-3 地質	1-5
1-4 気候・気象	1-7
第2章 流域及び河川の自然環境	2-1
2-1 流域の自然環境	2-1
2-2 河川及びその周辺の自然環境	2-3
2-3 特徴的な河川景観や文化財等	2-12
2-4 自然公園等の指定状況	2-16
第3章 流域の社会状況	3-1
3-1 人口	3-1
3-2 土地利用	3-2
3-3 産業・経済	3-5
3-4 交通	3-6
第4章 水害と治水事業の沿革	4-1
4-1 既往洪水の概要	4-1
4-2 治水事業の沿革	4-9
第5章 水利用の現状	5-1
5-1 水利用の変遷と現状	5-1
5-2 渇水被害と渇水対応の現状	5-6
5-3 水利用に係わる今後の方向性	5-10
第6章 河川状況と水質	6-1
6-1 河川流況	6-1
6-2 河川水質	6-2

第7章 河川空間の利用状況	7-1
7-1 河川の利用状況	7-1
7-2 河川敷の利用状況	7-2
第8章 河道特性	8-1
第9章 河川管理の現状	9-1
9-1 河川管理区間	9-1
9-2 河川管理施設	9-3
9-3 河道内植生	9-4
9-4 水防体制	9-5
9-5 危機管理の取り組み	9-7
第10章 地域との連携	10-1

# 第1章 流域の自然条件

## 1-1 河川・流域の概要

矢部川は、その源を福岡県矢部郡矢部村の福岡、大分、熊本の3県にまたがる釈迦ヶ山地の三国山（標高994m）に発し、日向神峡谷の山間に流下し、八女市において、最大支川星野川を合わせ、さらに辺春川、白木川、飯江川等を合わせながら、また、山ノ井川、花宗川、沖端川を分派しながら有明海に注ぐ、幹川流路延長61km、流域面積647km<sup>2</sup>の福岡県内では、筑後川、遠賀川に次ぐ第三位の河川である。

その流域は、福岡県（八女市、筑后市、柳川市等）の5市2町からなり、上流域には、日向神峡谷と呼ばれる、神々の伝説を秘めた大岩壁や白糸の滝等がある。この周辺では豊かな自然が残されており、上流部の星野川合流付近から上流一帯が、矢部川県立自然公園に指定されている。中流域には、矢部川のシンボルでもあるクスノキ林が川沿いに群生し、ゲンジボタルもクスノキ同様、国の天然記念物に指定されている。下流域は、有明沿岸の海苔養殖漁業の拠点として発展した漁港が存在するなど、独特の河川景観を創り出しており、さらに下ると河口に至りここは有明海特有の干潟を形成している。

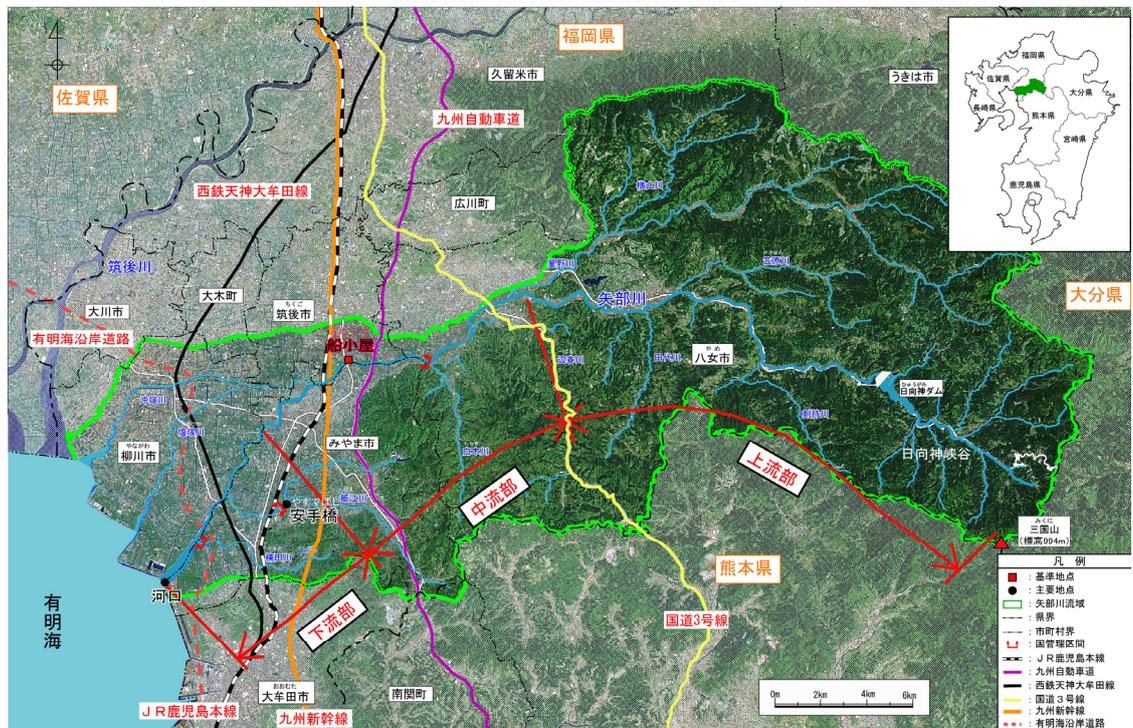


図-1.1 矢部川水系流域図



図-1.2(1) 矢部川上流部(日向神ダム)



図-1.2(2) 矢部川中流部(基準地点:船小屋)



図-1.2(3) 矢部川下流部(河口)

【出典: 矢部川航空写真 (H16)】

## 1-2 地形

矢部川流域の上流部の地形は東側の釈迦ヶ岳山地を中心として矢部川、御側川、樫鶴川、星野川などによって浸食された谷密度が大きく複雑で急峻な山地を形成している。大部分が杉林であるが、山頂部はブナ林が植生している。上流部の北側の耳納山地は、傾動地塊山地の特徴が見られ、ほぼ東西に走る構造線に沿って、横山川、星野川などの浸食谷が刻まれている。上流部の南側の筑肥山地は開析が進み、傾斜が緩やかな山地となっている。

中流部は高位段丘、扇状地性低地となっており高位段丘部には果樹園、茶畑が多く見られ、扇状地性低地部は大部分が水田であるが堆積によって高くなった土地には、集落以外に畑、茶畑、果樹園などに利用されているところが見られる。

下流部は三角州性低地で矢部川水系の堆積による微細な泥土質から成る典型的な低湿地で、クリーク網が発達しており大部分が水田である。

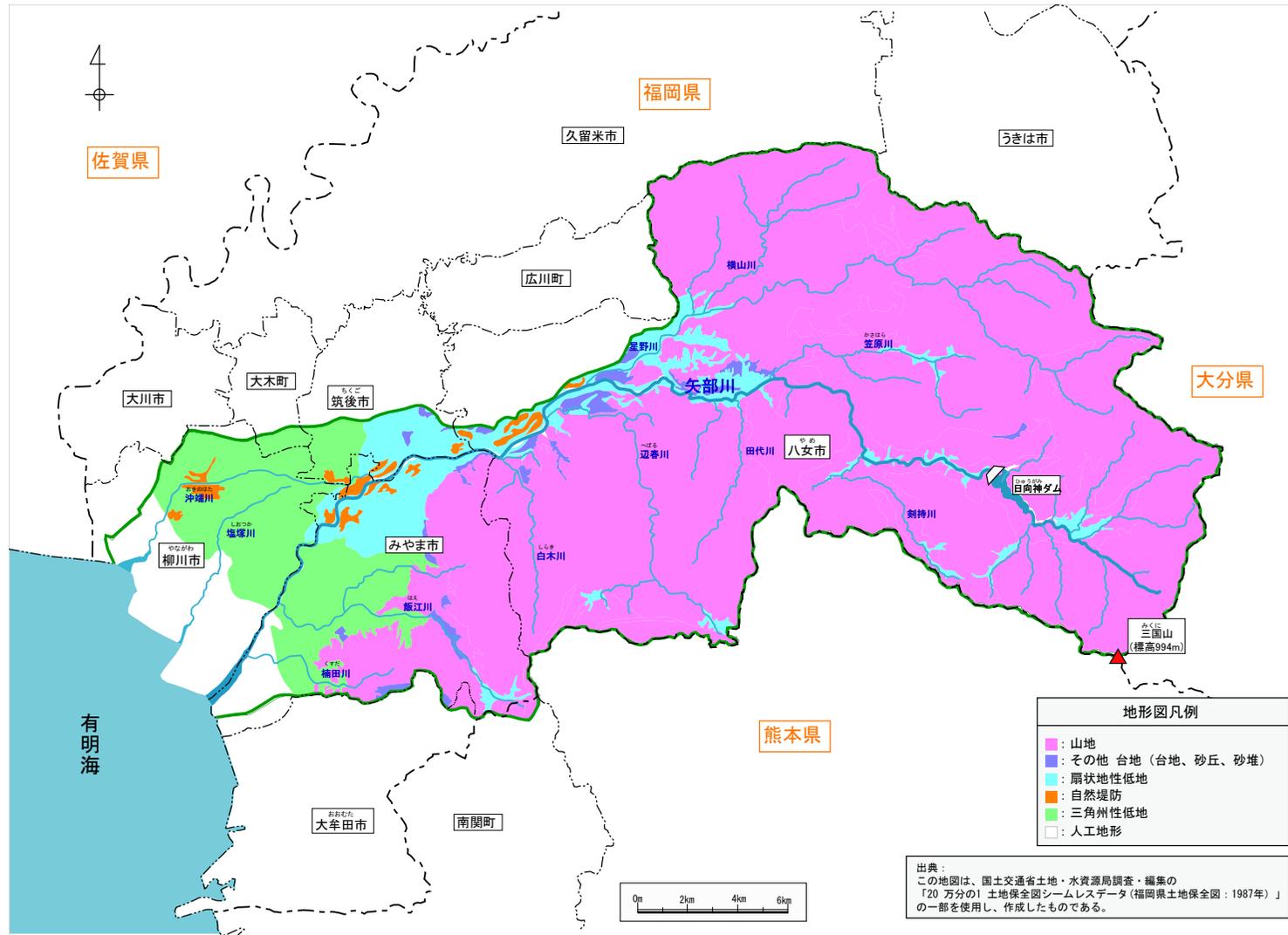


図-1.3 矢部川流域地形図

### 1-3 地質

矢部川流域の地質は、上流部の東側の釈迦ヶ岳山地は、大部分が輝石安山岩きせきあんざんがんや、粗大な火山岩屑かざんがんせつが火山灰によって凝結された凝灰質角礫岩ぎようかいしつかくれきがんである。矢部川上流の谷には変成岩へんせいがんがみられ、一部には阿蘇山の溶結凝灰岩ようけつぎようかいがんが堆積している。この、阿蘇溶結凝灰岩は、硬度が弱く加工が容易であるため古くから石材として利用されてきた。八女地方の古墳群の石造物や、現在、八女地方の特産品となっている八女石灯籠の材料となっている。

上流部の北側の耳納山地、南側の筑肥山地は、筑後（三郡）変成岩とよばれる岩石から成り、黒色砂質準片岩こくしよくさしつじゆんぺんがん・緑色準片岩りよくしよくじゆんぺんがんなどが大部分を占めている。

矢部川かさばらと笠原川の合流点付近黒木盆地北東の星野川との間にある豊岡台地、および八女台地は洪積世の堆積物である。八女台地の高位段丘は、火山性岩石の赤色系礫層で「吉田礫層」とよばれる地層である。中位段丘・低位段丘は、礫層上部に褐色細粒火山灰かつしよくさいりゅうかざんばい、軽石質ローム層、八女粘土層などがある。八女市街地周辺から筑後市南部・西部、さらに西の低地は、砂、粘土などの沖積層で西へ向かうほど細粒化している。

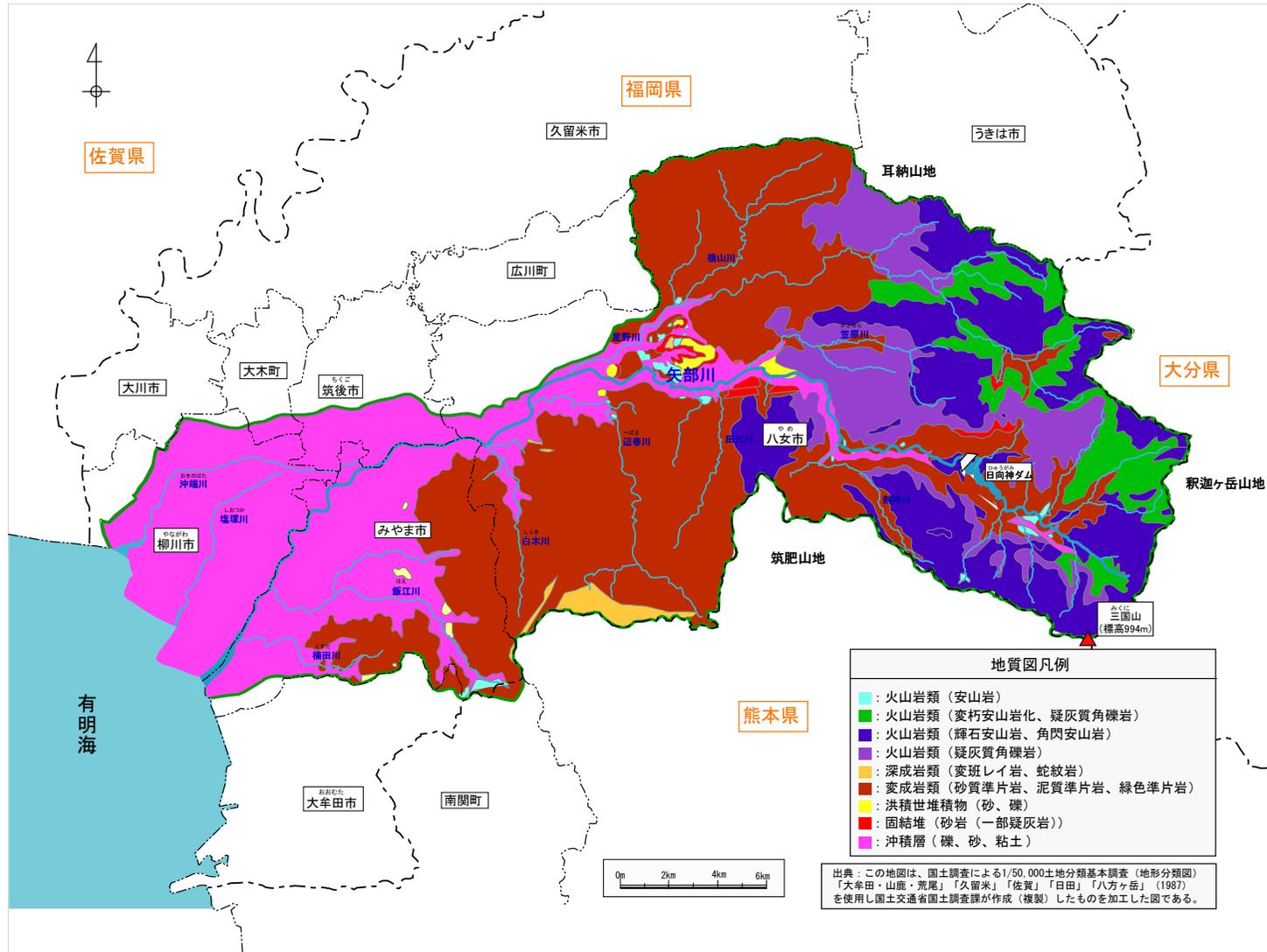


図-1.4 矢部川流域地質図

#### 1-4 気候・気象

矢部川流域は、上流部は山地型、下流部は内陸型気候区に属しており、代表地点における年平均気温は下流部で約 16℃、上流部で約 15℃である。

月別平均降水量における 6、7 月の平均降水量は下流部で約 330mm、上流部で約 390mm となり、年平均降水量は下流部で約 1,750mm、上流部で 2,020mm であり、上流部における降水量が多い。

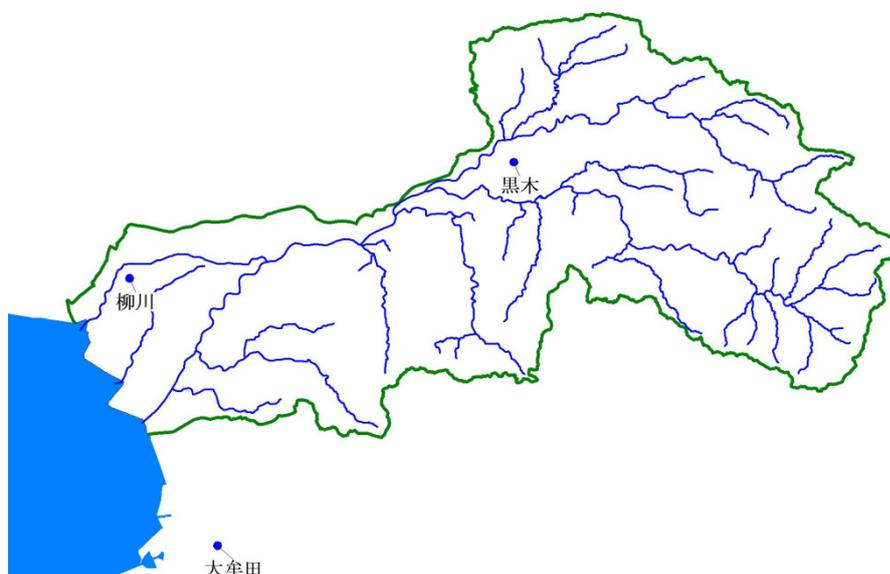


図-1.5 矢部川流域雨量観測所位置図（気象台）

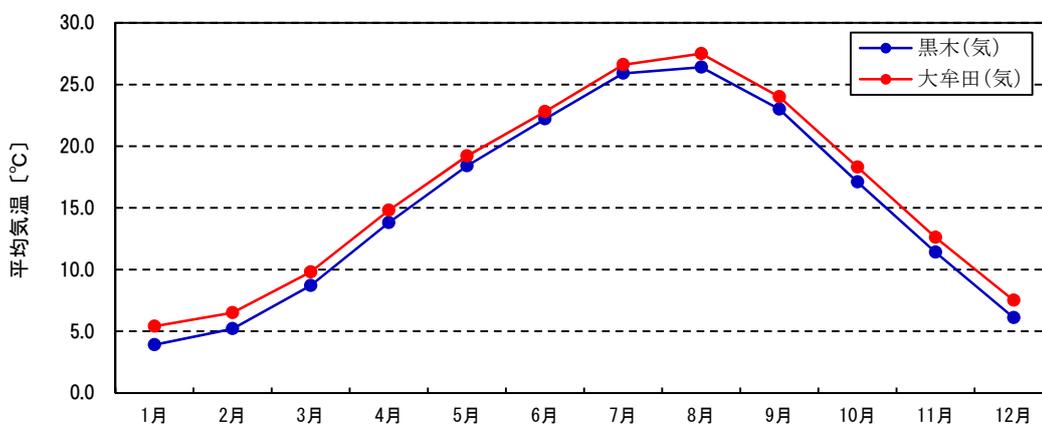


図-1.6 代表地点の月別平均気温（気象台）

【出典：気象台気温データ（1981～2010）】

※「柳川」では気温観測を実施していないため近傍の「大牟田」を引用

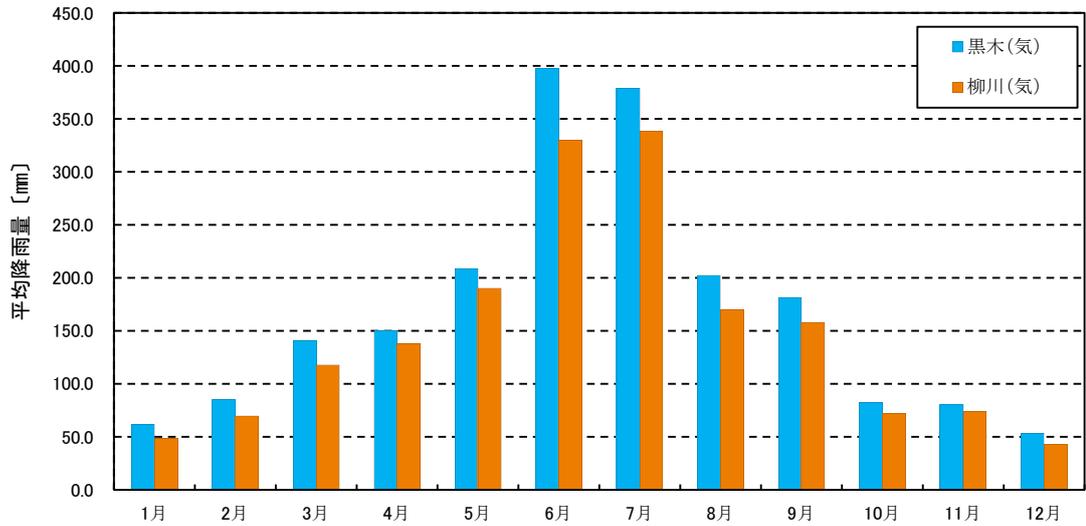


図-1.7 代表地点における月別平均降水量

【出典：気象台月別平均雨量データ（1981～2010）】

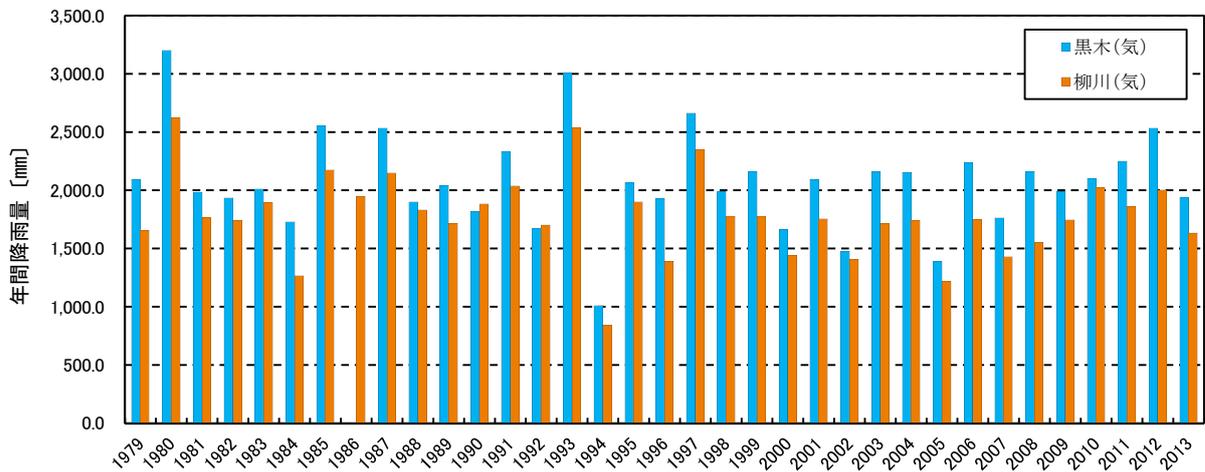


図-1.8 代表地点における年間降水量の変遷

【出典：気象台年間雨量データ（1979～2013）】

## 第2章 流域及び河川の自然環境

### 2-1 流域の自然環境

矢部川は、その源を三国山に発し、日向神峡谷の溪流を集め西流したのち、山間を離れ、八女市において、支川星野川を合わせる。さらに支川・辺春川、白木川等を合流し、基準地点船小屋下流で沖端川を分派し、筑後平野を蛇行しながら、途中、支川飯江川、楠田川を合わせ、有明海に注いでいる。

源流から花宗堰までの上流部には、日向神峡谷と呼ばれる、神々の伝説を秘めた大岩壁や白糸の滝等がある。この周辺には豊かな自然が残されており、鳥類、昆虫類も多く生息している。

また、日向神峡谷を下り花宗堰に至る区間は、矢部川沿川に集落や果樹園が間近に迫る溪流区間であり、近くには、国の天然記念物に指定されている黒木大フジが見られる。

花宗堰から瀬高堰までの中流部は、河岸にクスノキ林や竹林が帯状に分布しており、水際にはヨシやツルヨシ群落が生息し、一部にはマコモ群落も見られる。また、河原や中洲が形成されていることから、砂礫地を好むシギ・チドリ類が生息している。河道内は、瀬淵の変化に富んでおり、瀬や淵を好むオイカワやウグイが生息し、瀬はアユの産卵場ともなっている。初夏には清流を好むゲンジボタルの成虫も出現する。

瀬高堰から河口までの下流部は、感潮区間であり、アイアシ群落の前面には貴重な塩生植物群落が見られる。また、水域では汽水に生息するエツ等が見られ、河口付近は、有明海特有の河口干潟を形成しており、他の地域では見られないムツゴロウ、トビハゼ等、干潟特有の魚介類が生息している。また、この河口干潟には、多くの水鳥が訪れ、サギ類や、カモメ類等の干潟や沿岸部に生息する鳥類が見られる。

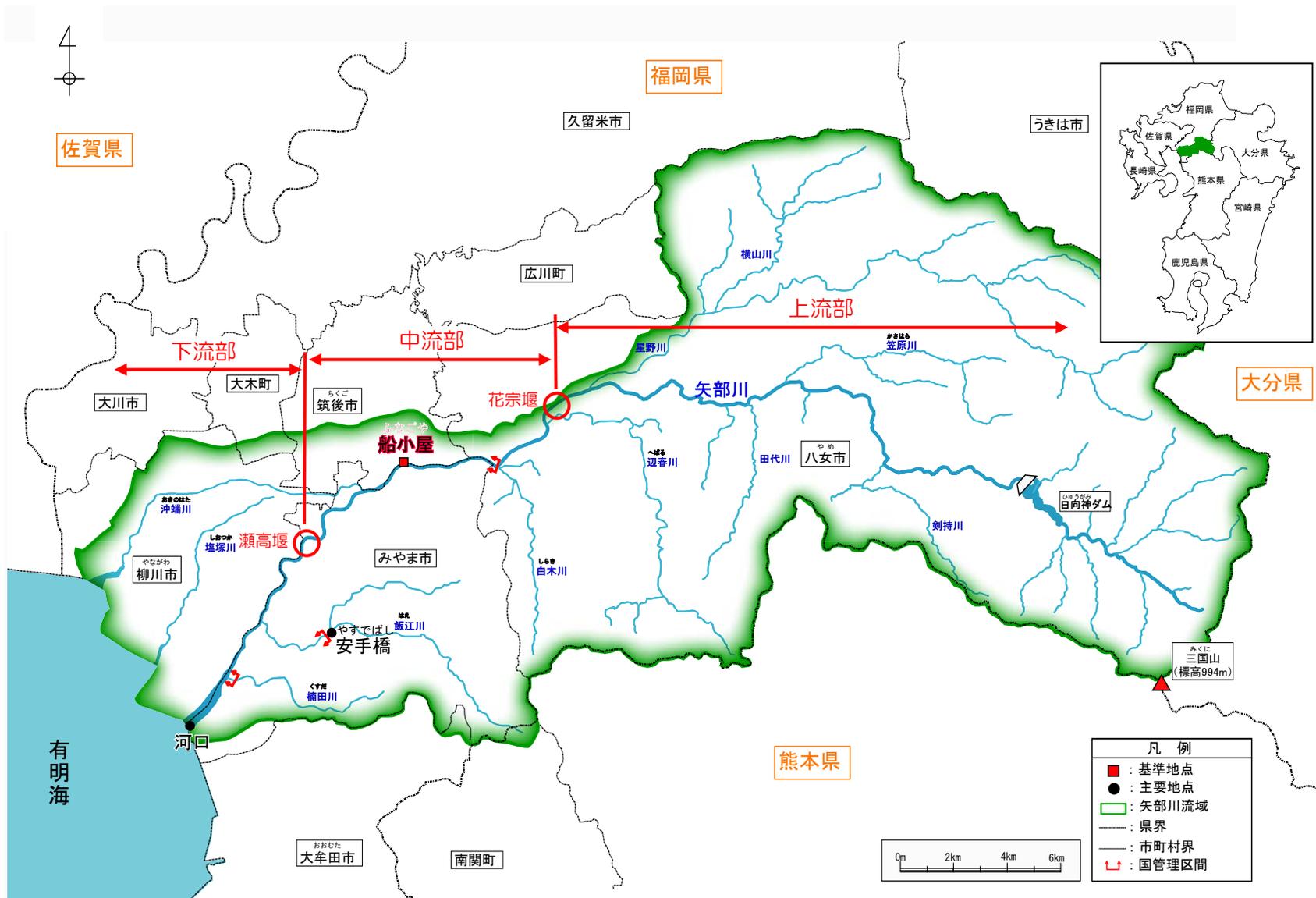


图-2.1 流域区分图

## 2-2 河川及びその周辺の自然環境

### 1) 上流部

源流から花宗堰までの上流部は、スギ・ヒノキ等植林が分布する急峻な山地となっており、川は山間部を縫うように流下する。河床は、礫・大礫で形成され、河畔林と、瀬・淵が連続する美しい溪流環境を呈し、水際にはツルヨシが繁茂し、水域には、カジカやサワガニ等が生息する。

上流域では、タカハヤ、オイカワ、ウグイ、ヨシノボリ類等の多様な魚類が見られる。鳥類では水域にカワセミ、コガモ、マガモ、砂礫地にセグロセキレイ、水際の植物にホオジロ、カワラヒワが見られる。



ウグイ



カジカ



タカハヤ

## 2) 中流部

花宗堰から瀬高堰までの中流部は、扇状地に広がる田園地帯や点在する市街地を貫流する。河床は、礫、砂で形成され、水際にはヨシやツルヨシ群落が、河岸にはクスノキ林や竹林等の河畔林が帯状に分布し、水面を覆っている。水域には瀬や淵が形成され、淵には河畔林からの落下昆虫や小魚等を餌とするカワムツ等が生息し、瀬はアユ等の産卵場となっている。川幅は変化に富み、広い箇所には細流やワンド等が形成され、カワニナやゲンジボタル、タナゴ類等が生息するなど、水域の連続性による多様性が見られる。特に、樹齢300年を超える船小屋のクスノキ林やその周辺のゲンジボタル発生地は国の天然記念物にも指定されている。船小屋から瀬高堰までは湛水区域となっており、高水敷にはヨシ等のイネ科草本の大規模な群落が見られ、オオヨシキリ等の草地を好む鳥類が生息している。



ヤリタナゴ



ゲンジボタル



アユ

### 3) 下流部

瀬高堰から河口までの下流部は、干拓により広がった田園地帯を緩やかに蛇行しながら流下する。瀬高堰より下流は汽水域となっており、有明海特有のアリアケシラウオ等が生息する。水際にはヨシ群落が生育し、フクドやヒロハマツナ等の貴重な塩生植物群落も見られ、河口付近の干潟には、ムツゴロウ、ハラグクレチゴガニ等が生息し、それらを捕食するシギ類等の水鳥が訪れる。



フクド



ムツゴロウ



ヒロハマツナ



ヨシ群落

#### 4) 矢部川の生物

##### ①生物相の概要

河川水辺の国勢調査結果をもとに、各生物相の概要を整理し、表-2.1に示す。

表-2.1 各生物相の概要

調査項目	生物相の概要
植物	平成19年度の現地調査(植物相)では111科605種の植物が確認されている。平成23年度の現地調査(植生調査)では49科132種が確認されている。 重要種は、植物相調査においてアオヒメタデ、コギシギシ、ヒロハマツナ、ハマサジ、フクド、ヤガミスゲ等の12種が確認され、植生調査においてヒロハマツナ、ハマサジ、クソニンジン、フクド等の5種が確認されている。 特定外来生物は、植物相調査においてアレチウリとオオキンケイギクが確認され、植生調査においてアレチウリ、ブラジルチドメグサ、オオキンケイギクが確認されている。
魚類	平成22年度の現地調査では29科76種の魚類が確認されている。このうち純淡水魚が約41%、汽水・海水魚が約50%、回遊魚が約9%となっている。 感潮域ではエツ、アリアケシラウオ、ヤマノカミ等の汽水・海水域の重要種が14種、日本国内では有明海だけに分布が限られている有明海特産種(固有種)が7種確認され、淡水域ではニッポンバラタナゴ、メダカ、オヤニラミ等の河岸植生や砂礫等の環境に依存した11種が確認されている。 特定外来生物は、オオクチバスとブルーギルが確認されている。
底生動物	平成21年度の現地調査では111科200種の底生動物が確認されている。このうち昆虫綱が85種で約43%、腹足綱・二枚貝綱が44種で約22%、軟甲綱が41種で約21%を占めている。 重要種は、主に有明海に面する河口干潟を反映して多くの貝類(腹足綱・二枚貝綱)やカニ類(軟甲綱)で構成される17科26種が確認された。その内、約88%に相当する23種が感潮域で確認されている。 特定外来生物は確認されていない。
鳥類	平成24年度の現地調査では13目34科105種の鳥類が確認されている。渡り区分の内訳は、留鳥が46種で約44%、夏鳥が10種で約10%、冬鳥が35種で約33%、旅鳥が11種で約10%、外来種が3種で約3%となっている。 重要種は、ササゴイ、ミサゴ、イカルチドリ、タゲリ、コアジサシ、ヤマセミ、オオヨシキリ等の20種が確認されている。 特定外来生物は、ソウシチョウが確認されている。
両生類 爬虫類 哺乳類	平成17年度の現地調査では両生類4種、爬虫類5種、哺乳類9種が確認されている。 重要種は、爬虫類のニホンスッポン、哺乳類のカヤネズミが確認されている。 特定外来生物は、両生類のウシガエルが確認されている。
陸上 昆虫類	平成20~21年度の現地調査では804種(昆虫類725種、クモ類79種)が確認されている。確認種のうちコウチュウ目が231種で約29%、ハエ目が108種で約13%、カメムシ目が104種で約13%、チョウ目が94種で約12%を占めている。 重要種は、セマルケシマグソコガネ、コムラサキ、フクロクヨコバイの3種が確認されている。 特定外来生物は確認されていない。

表-2.2 矢部川における河川水辺の国勢調査の実施状況

調査項目	調査年度																							
	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	
河川調査〔瀬・淵〕		●	●	●				●					●				●					●		
魚介類調査	●				●	●					●					●					●			
底生動物調査					●	●				●					●					●				
植物調査				●				●	●				●				●	●						
鳥類調査		●	●				●	●				●											●	
両生類・爬虫類・哺乳類調査					●	●					●	●				●								
陸上昆虫类等調査		●	●						●	●					●	●				●	●			

※調査項目の序列は、「河川水辺の国勢調査マニュアル」に準拠して整理している。

②特定種

学術上の重要性及び希少性の観点から、表 2-3 に示す選定基準に該当する種を重要種として選定した。表-2.3 に矢部川の重要種を示す。

表-2.3(1) 重要種選定基準

文献 No.	区分	所管管理者	年度	内 容	選定対象 〈 〉 内略号
1	文化財保護法 文化財保護条例	文化庁 都道府県	1950	学術上価値の高い動植物等のうち重要なものを天然記念物に指定	国指定天然記念物〈国天〉 都道府県指定天然記念物〈県天〉 市町村指定天然記念物〈市町天〉
2	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律	環境庁	1993	絶滅のおそれのある野生動植物種を指定し、保護、譲渡、輸出入等を規制	国内稀少野生動物種〈絶滅〉 (対象：植物、魚類、鳥類、両生類、爬虫類、哺乳類、昆虫類)
3	報道発表資料 平成 24 年 8 月 28 日 第 4 次レッドリストの公表について	環境省	2012	哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物(クモ形類、甲殻類等)、植物 I (維管束植物)、植物 II (維管束植物以外：蘚苔類、藻類、地衣類、菌類)を対象	絶滅〈EX〉 野生絶滅〈EW〉 絶滅危惧 I A 類〈CR〉 絶滅危惧 I B 類〈EN〉 絶滅危惧 I 類〈CR+EN〉 絶滅危惧 II 類〈VU〉 準絶滅危惧〈NT〉
	報道発表資料 平成 25 年 2 月 1 日 第 4 次レッドリストの公表について(汽水・淡水魚類)	環境省	2013	汽水・淡水魚類を対象	情報不足〈DD〉 絶滅のおそれのある地域個体群〈LP〉
4	福岡県の希少野生生物 ー福岡県レッドデータブック 2001ー	福岡県	2001	福岡県における絶滅のおそれのある野生生物を選定	絶滅〈EX〉 野生絶滅〈EW〉 絶滅危惧 I A 類〈CR〉 絶滅危惧 I B 類〈EN〉 絶滅危惧 I 類〈CR~EN〉 絶滅危惧 II 類〈VU〉 絶滅危惧〈CR~VU〉
	福岡県の希少野生生物 ー福岡県レッドデータブック 2011ー	福岡県	2011	植物群落・植物・哺乳類・鳥類を対象とした改訂版	準絶滅危惧〈NT〉 情報不足〈DD〉 天然不明〈UK〉 保全対策依存〈CD〉 絶滅のおそれのある地域個体群〈LP〉
5	「自然公園法」における指定植物	福岡県		矢部川県立自然公園内における指定植物に指定	矢部川県立自然公園指定植物〈県公園〉
6	第 2 回 自然環境保全基礎調査 (特定植物群落調査)	環境庁	1978	学術上重要な群落、保護を必要とする植物群落を選定	特定植物群落〈重要〉

出典：各種レッドデータブック概要より

表-2.3(2) 矢部川水系で確認された重要種（1）

生物	重要種	
魚類	<p>ニホンウナギ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      エツ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)                      ヤリタナゴ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      アブラボテ(環境省：準絶滅危惧)                      セボシタビラ(環境省：絶滅危惧ⅠA類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)                      カネヒラ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      ニッポンバラタナゴ(環境省：絶滅危惧ⅠA類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)                      カゼトゲタナゴ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)                      カワヒガイ(環境省：準絶滅危惧)                      ゼゼラ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：)                      ドジョウ(環境省：情報不足, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)                      ヤマトシマドジョウ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類)                      アリアケギバチ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      アユ(福岡県 RDB：天然不明)                      アリアケシラウオ(環境省：絶滅危惧ⅠA類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)                      アリアケヒメシラウオ(環境省：絶滅危惧ⅠA類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)                      メダカ南日本集団(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      クルメサヨリ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)                      ガンテンイシヨウジ(福岡県 RDB：情報不足)                      ヤマノカミ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      カジカ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：野生絶滅)                      オヤニラミ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      スズキ(環境省：絶滅のおそれのある地域個体群)                      カワアナゴ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      タビラクチ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)                      ムツゴロウ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)                      トビハゼ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)                      ワラスボ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類)                      ハゼクチ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)                      ショウキハゼ(環境省：準絶滅危惧)</p>	30種

表-2.3(2) 矢部川水系で確認された重要種（2）

生物	重要種	
底生動物	イシマキガイ(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類) ヒロクチカノコガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類) クロヘナタリガイ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) シマヘナタリガイ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) カワグチツボ(環境省：準絶滅危惧) オオクリイロカワザンショウガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) ムシヤドリカワザンショウガイ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) ヤミカワザンショウ(環境省：準絶滅危惧) カワザンショウガイ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) アズキカワザンショウガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類) ウミゴマツボ(環境省：準絶滅危惧) サキグロタマツメタガイ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類) マルテンスマツムシ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類) ヤベカワモチ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類) センベリアワモチ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類) ナラビオカミミガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) オカミミガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類) クリイロコミミガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) キヌカツギハマシイノミガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) ウミマイマイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) モノアラガイ(環境省：準絶滅危惧) ヒラマキミズマイマイ(環境省：情報不足, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類) クルマヒラマキガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類) ヒラマキガイモドキ(環境省：準絶滅危惧) ササゲミミエガイ(環境省：絶滅危惧Ⅰ類) ハイガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類) テリザクラガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類) ウネナシトマヤガイ(環境省：準絶滅危惧) ヤマトシジミ(環境省：準絶滅危惧) マシジミ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類) ハナグモリガイ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類) ヒメムツアシガニ(福岡県 RDB：情報不足) ムツハアリアケガニ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) アリアケガニ(福岡県 RDB：絶滅危惧) アリアケモドキ(福岡県 RDB：絶滅危惧) ハラグクレチゴガニ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅のおそれのある地域個体群) シオマネキ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧) ハマガニ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) ヒメアシハラガニ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) クシテガニ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) ベンケイガニ(福岡県 RDB：絶滅危惧) ウモレベンケイガニ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) タベサナエ(環境省：準絶滅危惧) カワゴケミズメイガ(環境省：準絶滅危惧) ヨコミゾドロムシ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類)	45 種

表-2.3(2) 矢部川水系で確認された重要種 (3)

生物	重要種	
植物	<p>チスジノリ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅰ類)  ツマグロカワモズク(環境省：絶滅危惧Ⅰ類)  アオカワモズク(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  ヒノキ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  アオヒメタデ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  ネバリタデ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  コギシギシ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ウシオツメクサ(福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)  ヒロハマツナ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)  ニッケイ(環境省：準絶滅危惧)  ツキシキオトギリ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)  コイスガラシ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ハマボウ(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ミゾマツバ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  カラタチバナ(福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)  ハマサジ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ロクオンソウ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)  ミゾコウジュ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  シソクサ(福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)  カワヂシャ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  クソニンジン(福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)  フクト(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ウラギク(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)  オグルマ(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  アズマガヤ(福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)  ヤガミスゲ(福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠB類)  船小屋のクスノキ林 (国指定天然記念物, 特定植物群落)  矢部川の河辺草本群落 (特定植物群落)</p>	28 種
鳥類	<p>ササゴイ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  アマサギ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  チュウサギ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  ツクシガモ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  オシドリ(環境省：情報不足, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  アカハジロ(環境省：情報不足)  ミサゴ(環境省：準絶滅危惧)  ハイタカ(環境省：準絶滅危惧)  ノスリ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  チュウヒ(環境省：絶滅危惧ⅠB類, 福岡県 RDB：絶滅危惧ⅠA類)  ハヤブサ(国内希少野生動物種, 環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  コチョウゲンボウ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  クイナ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  ヒクイナ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  イカルチドリ(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  シロチドリ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  タゲリ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  ハマシギ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)  ダイシャクシギ(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  セイタカシギ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類)  ツバメチドリ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ズグロカモメ(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  コアジサン(環境省：絶滅危惧Ⅱ類, 福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  アオバズク(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ヤマセミ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  コシアカツバメ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  クロツグミ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  オオヨシキリ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  オオルリ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  コサメビタキ(福岡県 RDB：情報不足)  サンコウチョウ(福岡県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)  ツリスガラ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)  カササギ(国指定天然記念物)</p>	33 種

表-2.3(2) 矢部川水系で確認された重要種（4）

生物	重要種	
両生類	トノサマガエル(福岡県 RDB：絶滅危惧 I B 類)	1 種
爬虫類	ニホンスッポン(環境省：情報不足, 福岡県 RDB：準絶滅危惧)	1 種
哺乳類	カヤネズミ(福岡県 RDB：絶滅危惧) キツネ(福岡県 RDB：準絶滅危惧)	2 種
陸上昆虫類	キシノウエトタテグモ(環境省：準絶滅危惧) キイロサナエ(環境省：準絶滅危惧) タベサナエ(環境省：準絶滅危惧) ウスバカマキリ(環境省：情報不足) フクロクヨコバイ(環境省：準絶滅危惧) クロアシブトハナカメムシ(環境省：準絶滅危惧) ベニツチカメムシ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) オオアメンボ(福岡県 RDB：絶滅危惧 II 類) ハイイロボクトウ(環境省：準絶滅危惧, 福岡県 RDB：絶滅危惧 II 類) コムラサキ(福岡県 RDB：絶滅危惧 II 類) ヒカゲチョウ(福岡県 RDB：絶滅危惧 I 類) シロホソバ(環境省：準絶滅危惧) キシタアツバ(環境省：準絶滅危惧) ギンモンアカヨトウ(環境省：絶滅危惧 II 類) スナハラゴミムシ(環境省：絶滅危惧 II 類) アオヘリホソゴミムシ(福岡県 RDB：準絶滅危惧) スジヒラタガムシ(環境省：準絶滅危惧) シジミガムシ(環境省：絶滅危惧 I B 類) オオツノハネカクシ(環境省：情報不足) セマルケシマグソコガネ(福岡県 RDB：絶滅危惧 II 類) ジュウサンホシテントウ(福岡県 RDB：絶滅危惧 II 類) ヤマトアシナガバチ(環境省：情報不足) スギハラベッコウ(環境省：情報不足) クロマルハナバチ(環境省：準絶滅危惧) クズハキリバチ(環境省：情報不足)	25 種

## 2-3 特徴的な河川景観や文化財等

### 1) 矢部川の歴史的環境

矢部川の流域は「九州<sup>やまたいこく</sup> 邪馬台国」の舞台とも言われ、歴史的な多くの史跡が残っているところでもある。

特に、八女の古墳群はその代表的なもので、その中の一つ、岩戸山古墳<sup>いわとやま</sup>は、九州地方では最大級の前方後円墳といわれており、筑後風土記にある筑紫君磐井<sup>つくしのきみいらい</sup>の墓ともいわれている。その他、神社・仏閣も数多く分布していることが特徴の一つに挙げられる。

また、矢部川の歴史を振り返ると、藩政時代、久留米藩・柳川藩により堤防などを行ったのが本格的な治水事業の始まりと言われている。

この中で1590年頃、田尻総馬<sup>たじりそうま</sup>による千間土居等<sup>せんげんどうい</sup>の築造にあたっては、現在の矢部川のシンボルともなっているクスノキや竹林が、堤防を守るため植えられた。

現在、このクスノキは約1,000本近く残っており、全国的に稀なクスノキ中心の治水防備保安林として中流域の河川高水敷をはじめとして分布している。

また、矢部川の水は、古くから灌漑用水として利用されてきた。特に久留米藩と柳川藩が矢部川を境に国割りされて以来、争いは絶え間なく続き、廻水路<sup>かいすいろ</sup>という矢部川独特の利水システムを生み出した。これは、自ら設けた堰の水を他藩の堰に落とさないよう廻水路、いわゆるバイパスをつくったもので、当時の激しい水争いの歴史を物語っていると言える。

矢部川が位置する筑後平野は、九州最大の平野で、久留米市・佐賀市をはじめ多くの都市が分布している。矢部川流域にも水郷で知られる柳川市、お茶で名高い八女市、そして筑後市等の街が位置する。しかし、上流の町や村では過疎化の現象により急激な人口の減少、そして高齢化となっているのも、矢部川流域の特徴の一つに挙げられる。

また、矢部川沿いの船小屋温泉は、観光地として知られ多くの人手で賑わうところである。

【出典：矢部川の歴史 水利編】

## 2) 観光・景勝地

矢部川流域は、豊かな自然環境を有し観光資源としても多くの人々に利用されている。上流域では筑後川県立自然公園、矢部川県立自然公園として指定されており、キャンプ地などや自然散策の場になっている。中流域では、中ノ島公園を中心として子供の水遊びの場や遠足・写生大会などに利用されている。下流域では国内最大の干満差を有する有明海に注ぎ、特徴的な生物等の生息域となっている。



筑後川県立自然公園



矢部川県立自然公園



矢部川中ノ島公園



河口部の干潟状況

### 3) 文化財

表-2.4 国指定の文化財(文化財・名勝・天然記念物等)

番号	種別	名称	所在地	指定年月日
1	天然記念物	黒木のフジ	八女市	昭和3年1月31日
2	重要伝統的建造物群保存地区	八女市黒木	八女市	平成21年6月30日
3	重要文化財(古文書)	五条家文書	八女市	昭和13年7月4日
4	重要文化財(建造物)	松延家住宅	八女市	昭和52年1月28日
5	無形民俗文化財	はんや舞	八女市	昭和53年1月31日
6	国宝(工芸)	短刀(銘吉光ノ)	柳川市	昭和28年11月14日
7	重要文化財(工芸)	劔 銘 長光	柳川市	昭和12年5月25日
8	重要文化財(古文書)	大友家文書	柳川市	平成5年6月14日
9	重要文化財(古文書)	鷹尾神社大宮司家文書	柳川市	平成11年6月7日
10	重要文化財(古文書)	立花家文書	柳川市	平成16年6月8日
11	名勝	松濤園	柳川市	昭和53年8月25日
12	名勝	戸島氏庭園	柳川市	昭和53年8月25日
13	無形文化財	久留米餅	久留米市 広川町	昭和32年4月25日 昭和51年4月3日
14	天然記念物	カササギ生息地	柳川市 筑後市 みやま市	大正12年3月7日
15	天然記念物	船小屋ゲンジボタル発生地	筑後市 みやま市	昭和16年3月27日
16	名勝	清水寺本坊庭園	みやま市	昭和4年4月2日
17	史跡	女山神籠石	みやま市	昭和28年11月14日
18	重要無形民俗文化財	幸若舞	みやま市	昭和51年5月4日
19	天然記念物	新舟小屋のクスノキ林	みやま市	昭和49年6月18日
20	史跡	石神山古墳	みやま市	昭和51年2月6日

【出典：文化庁 国指定文化財等データベース (<http://www.bunka.go.jp/bsys/index.asp>)】

【出典：福岡県の文化財 (<http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/bunka/index.asp>)】

表-2.5 県指定の文化財(史跡・名勝・天然記念物)

番号	種別	名称	所在地	指定年月日
1	史跡	童男山古墳(八女古墳群)	八女市	昭和31年7月28日
2	天然記念物	山内のチシャノキ	八女市	昭和33年11月13日
3	天然記念物	轟区のビャクシン	八女市	昭和61年8月28日
4	有形文化財(彫刻)	木造聖観音立像	八女市	昭和53年3月25日
5	無形民俗文化財	田代の風流	八女市	昭和51年4月24日
6	無形民俗文化財	旭座人形芝居	八女市	昭和51年4月24日
7	史跡	猫尾城跡	八女市	昭和58年3月19日
8	天然記念物	霊巖寺の奇岩	八女市	昭和35年1月12日
9	天然記念物	津江神社の大楠	八女市	昭和29年12月28日
10	天然記念物	荒谷のカエデ	八女市	昭和54年3月6日
11	天然記念物	空室のカツラ	八女市	平成元年5月18日
12	天然記念物	円福寺のビャクシン	八女市	昭和33年11月13日
13	天然記念物	タイサンボクとハクモクレンの癒着木	八女市	昭和33年11月13日
14	有形文化財(彫刻)	木造薬師如来立像	八女市	平成5年7月2日
15	無形民俗文化財	はんや舞	八女市	昭和51年4月24日
16	史跡	旧久留米藩・天領日田国境石	八女市	平成9年7月25日
17	天然記念物	桁山の榎の木	八女市	昭和48年11月15日
18	天然記念物	室山熊野神社の杉	八女市	昭和48年11月15日
19	天然記念物	麻生池のオグルコウホネ自生地	八女市	平成13年2月14日
20	無形民俗文化財	八女津媛神社の浮立	八女市	昭和51年4月24日
21	有形文化財(建造物)	旧戸島氏邸	柳川市	昭和32年4月23日
22	有形文化財(考古資料)	三尊預修板碑	柳川市	昭和44年9月4日
23	無形民俗文化財	どろつくどん	柳川市	昭和51年4月24日
24	無形民俗文化財	日子山神社風流	柳川市	昭和51年4月24日
25	無形民俗文化財	今古賀風流	柳川市	昭和51年4月24日
26	史跡	安東省庵墓	柳川市	昭和33年4月3日
27	史跡	北原白秋生家	柳川市	昭和43年10月12日
28	天然記念物	中山の大フジ	柳川市	昭和52年4月9日
29	有形文化財(建造物)	光明寺の石造九重塔	筑後市	昭和36年10月21日
30	有形文化財(考古資料)	滑石経	筑後市	昭和30年3月12日
31	有形文化財(彫刻)	石造狛犬	筑後市	昭和36年10月21日
32	天然記念物	水田の森(クス、カシ)	筑後市	昭和36年10月21日
33	有形民俗文化財	木造獅子頭	筑後市	昭和36年1月14日
34	有形民俗文化財	木造火水玉王面	筑後市	昭和36年1月14日
35	有形民俗文化財	石造狛犬	筑後市	昭和37年7月26日
36	無形民俗文化財	稚児風流	筑後市	昭和51年4月24日
37	無形民俗文化財	千燈明	筑後市	昭和51年4月24日
38	有形文化財(建造物)	清水寺三重塔	みやま市	昭和30年3月12日
39	有形文化財(建造物)	清水寺楼門	みやま市	昭和36年4月18日
40	無形民俗文化財	どんきんきん	みやま市	昭和54年3月6日
41	有形民俗文化財	大人形・大提灯	みやま市	昭和31年1月16日
42	有形文化財(考古資料)	法華経千部造修板碑	みやま市	昭和33年11月13日
43	有形文化財(考古資料)	貝製雲珠	みやま市	昭和34年3月31日
44	史跡	金栗遺跡	みやま市	昭和33年4月3日
45	天然記念物	長田のイチョウ	みやま市	平成16年2月18日
46	史跡	矩手水門 (旧柳河藩干拓遺跡)	みやま市	平成20年3月31日
47	無形民俗文化財	宝満神社奉納能楽	みやま市	昭和51年4月24日
48	史跡	新開村旧てい記碑	みやま市	昭和30年3月5日

【出典：福岡県の文化財 (<http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/bunka/index.asp>)】

【出典：みやま市(文化財) ([http://www.city.miyama.lg.jp/info/prev.asp?fol\\_id=2159](http://www.city.miyama.lg.jp/info/prev.asp?fol_id=2159))】

【出典：柳川市webサイト：文化財 (<http://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/life/study/culp/index.html>)】

【出典：八女市について【八女市公式ホームページ】 (<http://www.city.yame.fukuoka.jp/aboutyame/aboutyame.html>)】

【出典：福岡県造園業協会 福岡県内の天然記念物(樹木) (<http://www.fkz.or.jp/tennen/tennenn.htm>)】

## 2-4 自然公園等の指定状況

矢部川流域は自然環境に恵まれた地域が数多く存在しており、表-2.7に示すように自然公園が指定されている。

表-2.6 矢部川流域自然公園の指定状況

種別	名称	所在地
県立自然公園	矢部川県立自然公園	福岡県
	筑後川県立自然公園	福岡県

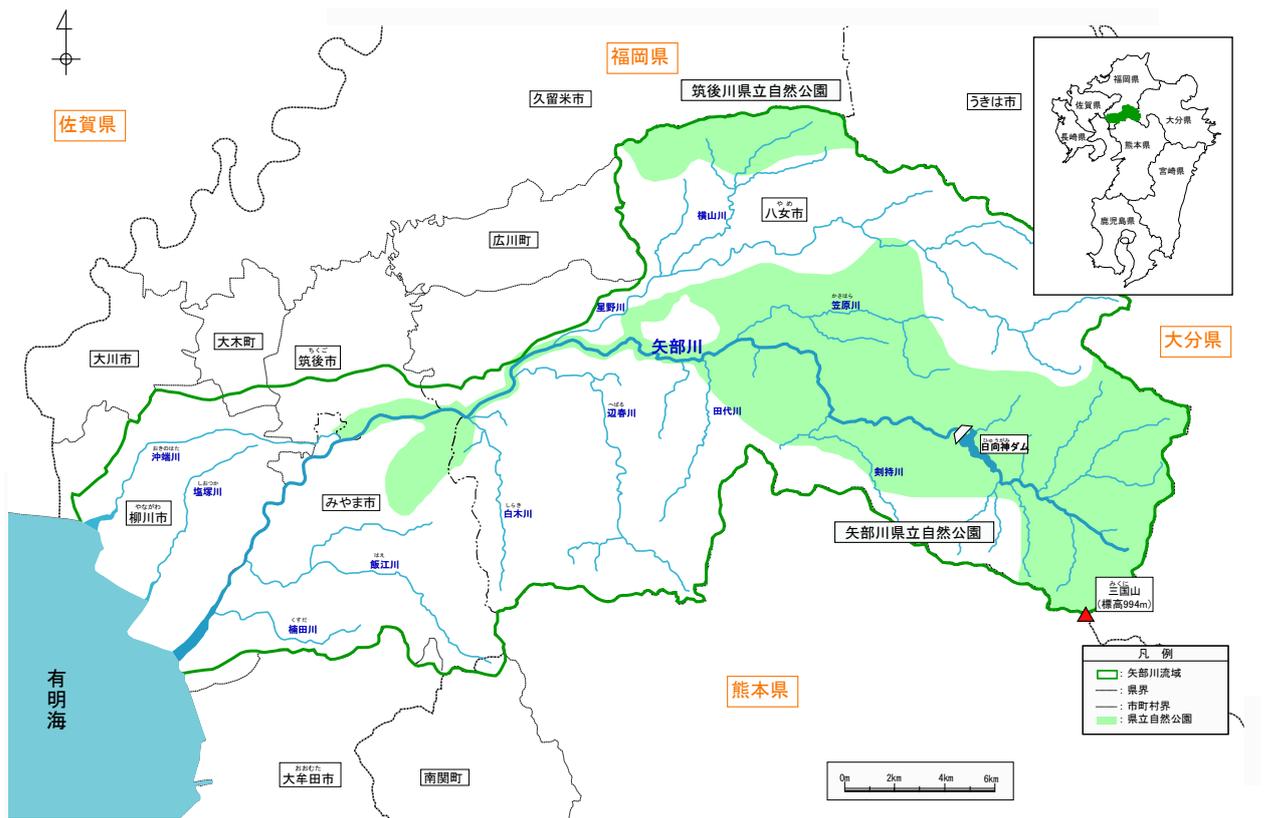


図-2.2 矢部川流域における自然公園位置図

### 第3章 流域の社会状況

#### 3-1 人口

矢部川流域の関係自治体は、筑後市や柳川市をはじめ5市2町からなり、平成22年現在で流域域内人口は約17万人、氾濫防御区域内人口は約11万人となっている。

表-3.1 流域内人口の推移

年次区分	昭和45年 (人)	昭和50年 (人)	昭和55年 (人)	昭和60年 (人)	平成2年 (人)	平成7年 (人)	平成15年 (人)	平成22年 (人)	人口密度 (人/km <sup>2</sup> )
流域内							182,889	166,123	
想定氾濫 区域内							116,383	114,981	
福岡県	4,027,416	4,292,963	4,553,461	4,719,259	4,811,050	4,933,393	5,015,699	5,071,968	1,019.0

【出典：流域内人口、想定氾濫区域内人口は「河川現況調査」】

表-3.2 流域関連人口の推移

市町村	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
<b>福岡県</b>	<b>4,027,416</b>	<b>4,292,963</b>	<b>4,553,461</b>	<b>4,719,259</b>	<b>4,811,050</b>	<b>4,933,393</b>	<b>5,015,699</b>	<b>5,049,908</b>	<b>5,071,968</b>
柳川市	45,789	45,057	45,587	44,942	43,791	43,245	41,815	74,539	71,375
八女市	38,848	38,843	39,408	40,286	39,816	39,818	39,610	38,951	69,057
筑後市	38,688	39,520	41,698	43,359	43,835	45,289	47,348	47,844	48,512
みやま市									40,732
大木町	12,885	12,528	12,721	13,177	13,232	13,525	13,862	14,282	14,350
黒木町	19,367	17,941	17,705	17,267	16,616	15,691	14,685	13,615	※2
上陽町	5,834	5,670	5,483	5,240	4,953	4,508	4,223	3,867	※2
立花町	15,923	15,156	14,904	14,549	14,055	13,430	12,530	11,662	※2
矢部村	3,445	3,053	2,696	2,484	2,145	1,942	1,760	1,613	※2
星野村	5,471	5,073	4,882	4,730	4,310	4,103	3,881	3,554	※2
瀬高町	27,642	27,155	27,219	27,519	26,633	25,768	24,916	23,762	※3
大和町	19,667	19,151	19,283	19,178	18,699	18,134	17,343	※1	※1
三橋町	16,807	16,776	17,315	17,743	18,041	18,427	18,454	※1	※1
山川町	6,662	6,347	6,412	6,324	6,318	6,122	5,711	5,391	※3
高田町	18,564	18,255	17,782	17,766	17,053	16,038	15,081	14,219	※3

※1 平成17年3月21日をもって柳川市、大和町、三橋町が合併し、現在の柳川市となる。

※2 平成18年10月1日に上陽町、平成22年2月1日に黒木町、立花町、星野村が合併し、現在の八女市となる。

※3 平成19年1月29日に瀬高町、山川町、高田町が合併し、みやま市となる。

【出典：福岡県統計年鑑】

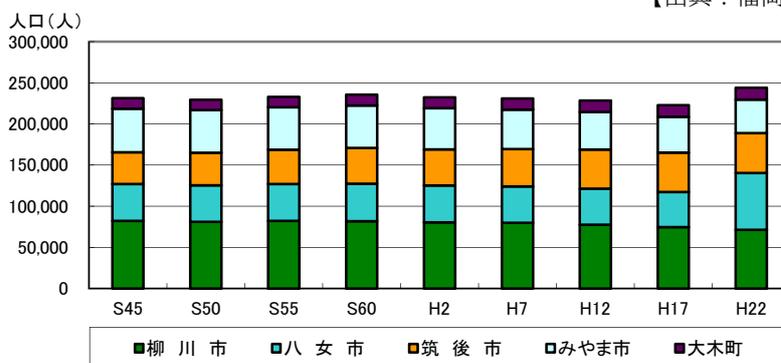


図-3.1 流域関連人口の推移

【出典：福岡県統計年鑑】

## 3-2 土地利用

### 1) 土地利用の現況

流域の土地利用は、山林が全体の約74%を占め、水田や畑・果樹園等の農地が約24%、宅地等市街地が約2%の割合となっている。

表-3.3 土地利用の現況

項目	面積 (km <sup>2</sup> )	全面積に占める割合 (%)
流域面積	647.0	100
森林地域	478.4	74
耕地面積 (田・畑)	155.9	24
宅地その他	12.7	2

【出典：平成22年3月第9回河川現況調査】

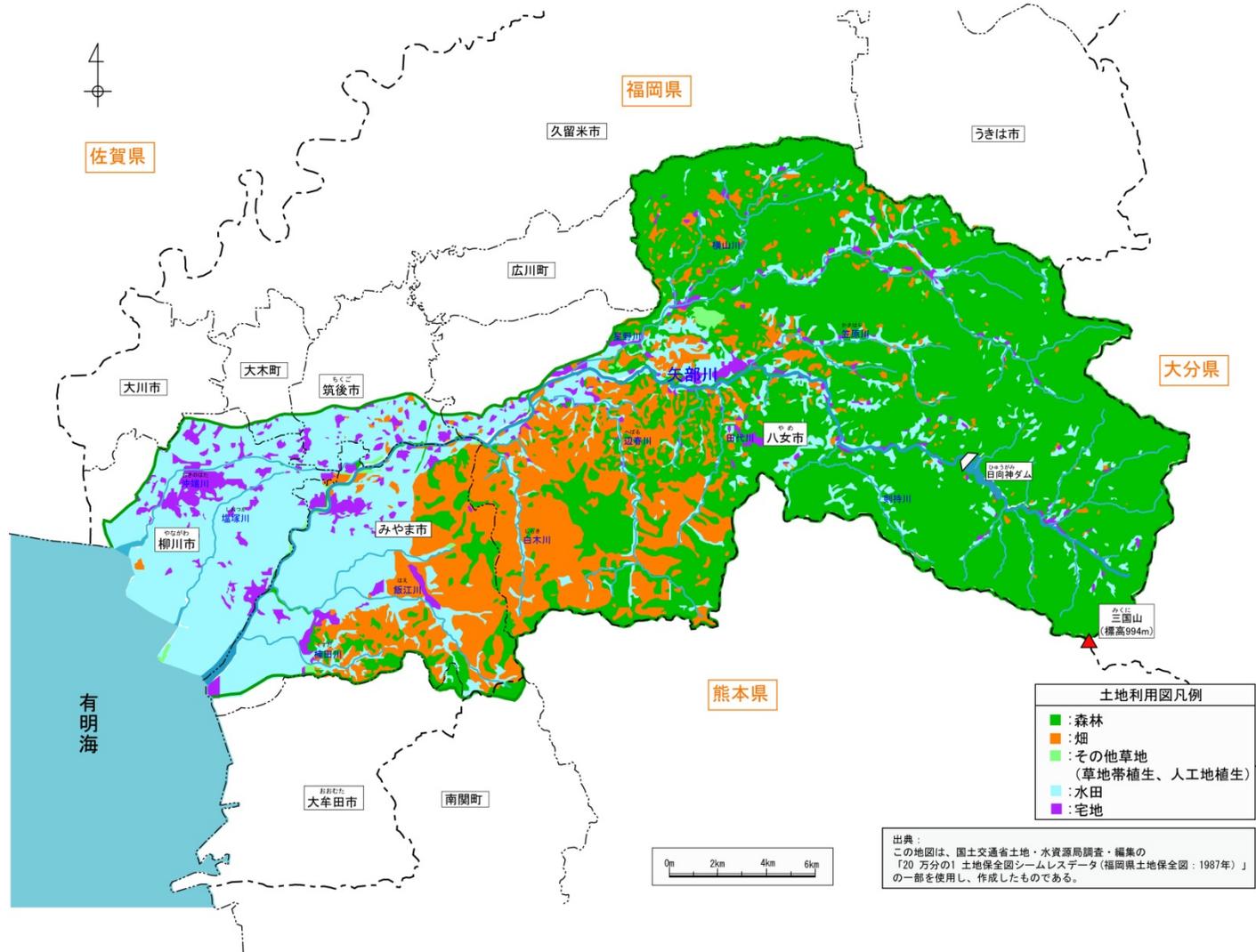


図-3.2 矢部川流域における土地利用図

## 2) 干拓の歴史

矢部川の下流域は、有明海の干拓によって開発されてきたもので、1400年ほど前から行われてきたと言われている。

大和町（現柳川市）では、今から400年ほど前の1601年（慶長7年）8月、当時の柳川藩主田中吉政が有明海沿岸32kmに慶長本土居を築いてから盛んに行われるようになった。これから海に向かって4kmほど先まで干拓が広がっていった。

だんだんと沖のほうへ干拓が広がると、満潮時は海水面が干拓地より高くなっていったため、柳川藩では1673年（寛文13年）に今までの土で築いた堤防の前面に石垣を積んで潮を止めるための潮土居を築いた。

さらに、1726年（享保11年）幕府令を受けて、藩士や藩による開発が盛んになり、急速に干拓地が広がった。藩営の干拓地として弁天開と住吉開を造成した。

【出典：大和町（現柳川市）パンフレット】



【出典：大和町（現柳川市）航空写真】

図-3.3 広がる干拓地（柳川市）

### 3-3 産業・経済

流域内の総資産額は平成22年3月時点で約2兆6,585億円で、その約半分は家屋資産が占めている。

流域内の主幹産業は、農業を中心とする1次産業で、矢部川上流では、木材・茶・みかん・酒が、また、有明海沿岸では、ノリ養殖が盛んである。

特に、茶は八女市を主産地としており、高級ブランド「八女茶」として全国的に知られ、なかでも八女市の中山間地にて生産される「玉露」は全国生産量の約4分の1を占め、「全国茶品評会※1」において『農林水産大臣賞※2』を受賞するなど高い評価を受けている。また、八女市は八女林業として優れた林業地帯としても知られ、その美木の産物として、しいたけ栽培も盛んである。

※1 全国茶品評会：茶の生産改善と消費拡大を目的に開催される、茶における最高位の品評会

※2 農林水産大臣賞：最高賞。玉露の部で平成22年度までに福岡県生産者（矢部川流域内）が10年連続受賞

表-3.4 流域内資産額（単位：億円）

家屋資産額	家財資産額	事業所資産額	農漁家資産額	合計
16,032	7,525	2,822	205	26,585

注) ( ) 書きは合計に対する比率

【出典：平成22年3月第9回河川現況調査】

表-3.5 流域内関連市町村の特産品

市町名	名産・特産品		
柳川市	<small>たたみおもて</small> 畳表	有明のり	<small>かすづけ</small> 粕漬
八女市	八女茶	<small>でんしょうぎく</small> 電照菊	<small>てすきわし</small> 手漉和紙
筑後市	<small>あかさか</small> 赤坂人形（玩具）	赤坂あめ	<small>はなむねがま</small> 花宗窯
みやま市	みかん	なす	たけのこ

【出典：財団法人 福岡県市町村振興協会『福岡県市町村要覧 平成25年度版』】

### 3-4 交通

矢部川流域は、福岡県の南部に位置し、九州における交通の南北線（九州自動車道、国道3号、国道209号）と福岡県、大分県、熊本県を通る東西線（国道442号）が交差していて、九州地方の人流・物流に多く利用されている。

鉄道は、北九州、福岡から熊本、鹿児島へ至るJR鹿児島本線及び九州新幹線が流域下流部を南北に縦断している。

また、西鉄大牟田線がJR鹿児島本線と平行しながら流域を南北に縦断して福岡と久留米・大牟田を結んでいて、福岡都市圏と筑後川流域との人流に大きく貢献している。

一方道路については、JR鹿児島本線と平行して九州の大動脈である九州自動車道が流域を縦貫している。

さらに、流域内には、下流部の国道3号や209号、下流と上流を結ぶ442号を含めて5本の国道が走り、その国道から分岐して主要地方道や一般県道、市町村道が整備されており、地域の発展に重要な役割を果たしている。また、有明海沿岸道路の開通によりさらに利便性が増すものと期待されている。

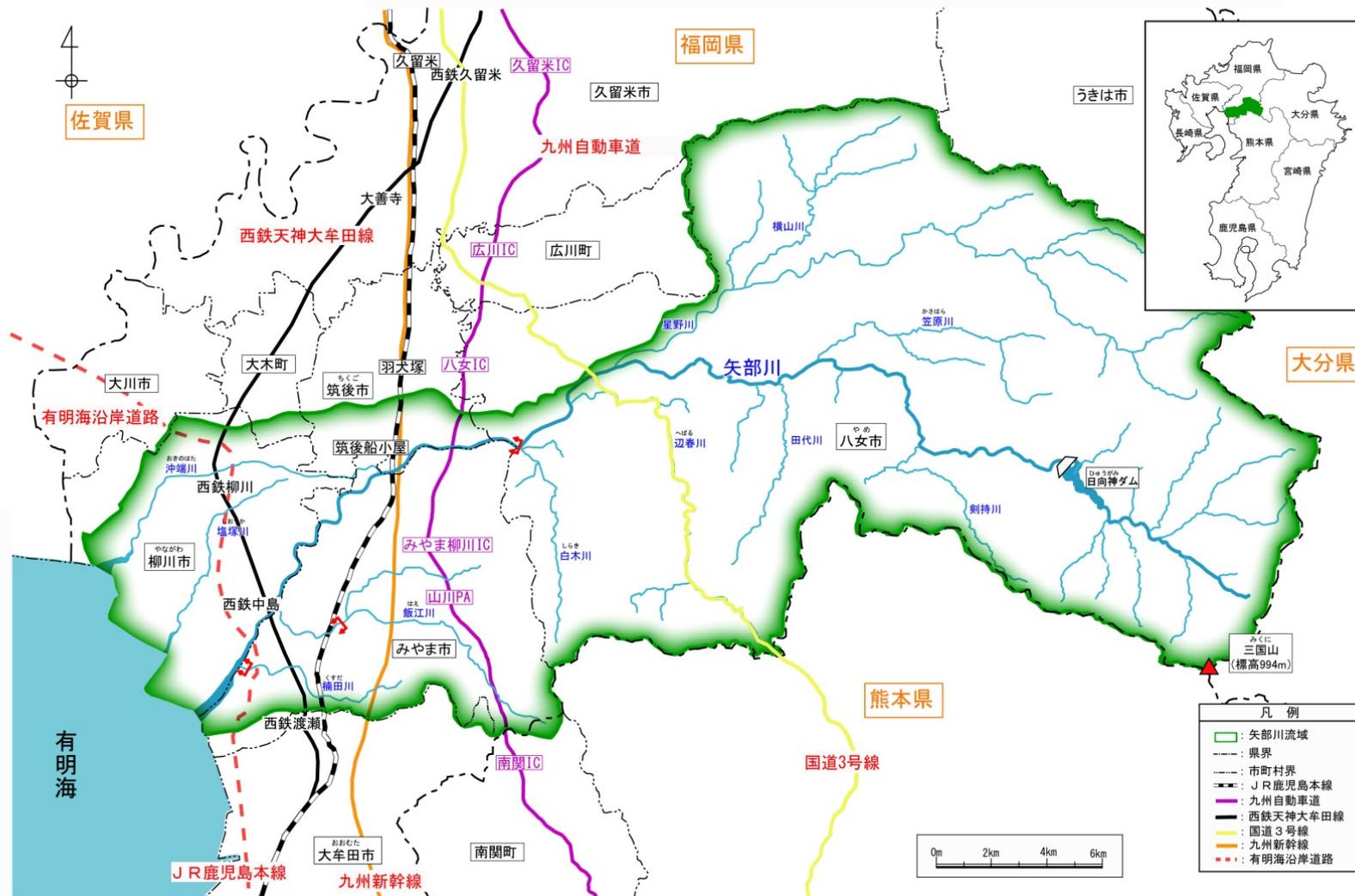


図-3.4 矢部川流域交通体系図

## 第4章 水害と治水事業の沿革

### 4-1 既往洪水の概要

#### 1) 矢部川の洪水の原因

矢部川流域の洪水は6月～7月上旬にかけての梅雨前線によるものが多く、大規模な洪水はほとんど梅雨期に発生している。このため、降雨は短時間に終わるものは少なく、3～6日間にわたるのが普通で、一週間以上降り続くこともある。このような長雨で流域が飽和状態にあるところに、短時間の豪雨があると大洪水となることが多い。

既往最大の洪水となった平成24年7月洪水では、7月11日～14日にかけて、福岡県、熊本県、大分県を中心に記録的な豪雨が発生し、矢部川管内の黒木雨量観測所では7月13日4時から14日14時までの総降水量が564mm、最大1時間雨量94mmを記録した。

そのため、矢部川国管理区間である柳川市六合地区で1カ所、矢部川派川沖端川（福岡県管理）のみやま市本郷地区で2カ所の計3カ所で堤防が決壊し、矢部川の地域特性のひとつである背後地には低平地が広がっていることから、氾濫流は広域にわたり拡散し、甚大な浸水被害が生じた。

#### 2) 洪水の歴史

矢部川は、川底の浅い天井川であり、かつ堤防が完備していないため、藩政期には少量の降雨によっても増水水害をもたらした。

藩政期の水害記録に矢部川のみに関する洪水記録は少なく、同一地方である筑後川の水害の記録をもとに、矢部川の水害を推定した。

近年の治水事業は昭和45年に福岡県より直轄事業として引き継ぎ、同年に作成された工事实施基本計画に沿って改修工事が進められている。

この工事实施基本計画は、昭和28年6月の大洪水を対象として定められたもので、基準地点である船小屋で、基本高水のピーク流量を3,500m<sup>3</sup>/sとし、そのうちの500m<sup>3</sup>/sを上流の日向神ダムでカットして、計画高水流量を3,000m<sup>3</sup>/sとしている。

平成9年の河川法改正を受け、河川整備の基本となるべき方針を定めた「矢部川水系河川整備基本方針」を平成19年11月に策定し現在に至っている。

しかし平成24年7月の九州北部豪雨では、基本高水のピーク流量を超える洪水が発生し、社会及び地域経済に甚大な影響を与えたことから、地域特性を踏まえた治水対策が急務となっている。

表-4.1 矢部川における既往水害記録（西暦 1600 年～1953 年（昭和 28 年））

年号	西暦	摘要
慶長 十六	一六一一	大雨、大洪水
寛永 二	一六二五	洪水
"	一六二七	洪水、久留米城下町家屋流失
"	一六三〇	暴風高潮 堤防欠 潰家多数
"	一六三二	全国的大暴風雨
慶安 三	一六五〇	大雨洪水
承応 二	一六五三	大雨洪水
万治 元	一六五八	霖雨洪水
"	一六六〇	大風雨洪水
寛文 七	一六六七	筑後川洪水
"	一六七八	洪水、江戸幕府検使派遣
"	一六七八	大風雨洪水、被害西日本一帯に及ぶ
延宝 元	一六七三	洪水 尾島町全滅 西日本一帯水害
"	一六七四	洪水
"	一六七九	大風雨洪水 柳川領堤防一〇、五六九間決壊
"	一六七八	倒家二、七二九軒
"	一六八〇	洪水
天和 八	一六八一	大風洪水
"	一六八三	洪水
元禄 三	一六八八	洪水
"	一六八八	洪水
"	一六九五	洪水
"	一六九八	洪水
"	一七〇二	洪水、矢部川堤防潰六〇間、朝倉郡一、八九三軒倒産
宝永 元	一七〇四	洪水柳川領潰家一五二軒
"	一七一〇	矢部川堤防決潰
享保 二	一七一六	大風洪水
"	一七一七	大風洪水 筑後川水二丈
"	一七二〇	洪水
"	一七二六	洪水 瀬下浸水五尺
"	一七二八	大風洪水 矢部川山沙
"	一七二九	暴風洪水
"	一七三二	洪水 柳川領堤防二、四五〇間決潰
元文 三	一七三八	洪水
寛保 二	一七四二	洪水 矢部川山潮瀬死多シ
延享 二	一七四五	洪水
寛延 二	一七四九	洪水
"	一七五〇	洪水
宝暦 七	一七五三	大風雨洪水
"	一七五七	洪水

年号	西暦	摘要
明和 二	一七六五	大風雨 梁川潰家一、三七四軒
"	一七六七	洪水 水位二丈高
安永 元	一七七二	佐賀領土居切所七九、二九二間
"	一七七六	洪水
"	一七七八	宮地出水二丈
天明 二	一七八二	大雨洪水
"	一七八八	洪水
寛政 元	一七八九	洪水
"	一七九一	洪水
"	一七九五	洪水
文化 七	一八〇四	船小屋二丈
"	一八〇七	洪水
"	一八一〇	大雨洪水
"	一八一四	洪水
"	一八一六	筑後川宮地老丈九尺
文政 七	一八二四	大雨洪水
"	一八二八	洪水
"	一八三〇	洪水 宮地二丈余
"	一八四〇	洪水
弘化 四	一八四七	未曽有の洪水 水位二丈三尺
嘉永 三	一八五〇	洪水 宮地二丈五尺
安政 五	一八五六	洪水 宮地二丈五尺
万延 元	一八六〇	大雨洪水
慶応 二	一八六六	暴風雨洪水 瀬ノ下二丈五尺
明治 七	一八七四	洪水
"	一八八三	洪水 瀬ノ下二丈五尺
"	一八八五	大洪水 瀬ノ下二丈八尺
"	一八九二	大洪水
"	一九〇〇	大洪水
"	一九〇一	洪水 瀬ノ下二丈三尺
"	一九〇五	洪水 瀬ノ下二丈七寸
大正 三	一九一四	暴風雨洪水
"	一九一九	大洪水 船小屋決潰
"	一九二二	大洪水
昭和 三	一九二八	大雨洪水
"	一九三五	大洪水 欠潰一〇、九三六町歩 花宗堰潰
"	一九四六	大洪水
"	一九五三	大洪水

【出典：矢部川の歴史 水利編】

### 3) 主要洪水の概要

#### ① 大正10年洪水

「6月17日前代未聞の大洪水を招き、矢部川星野川両流域に亘る二十一ヶ町村は、突如暴戾なる氾濫の害を受けて、橋梁住宅の流失、堤防堰塘の決潰田畑林野の荒廢其他人畜の死傷等各地挙て数ふ可からず。」これは当時の状況を記した「水害詩(八女郡)大正10年」の第一章「諸言」の一節である。

県・郡・町村災害土木費(八女郡内分)	(八女郡水害誌より)
道路費 214,744円、橋梁費 272,563円、河川堤防費 254,773円 雑費 5,090円	
合計 747,200円	他に純県費災害土木費(橋梁架替・修繕費) 7,190円
(当時の橋梁架設費は「現 442号 平橋の上流に残っている橋」 10,833円)	



図-4.1 大正10年洪水の様子

【出典：八女郡水害誌】

② 昭和 28 年洪水

矢部村では 2 日間の日雨量が 395mm で 4 日間（25～28 日）総雨量が 924mm にも達し、黒木 602mm、星野 691mm、羽犬塚 564mm を記録している。

こうした豪雨で河川が氾濫し堤防は決壊、橋は流失し、山地では地すべりを起こし家屋を破壊するといった状況が発生した。

八女土木管内査定額（県・市町村分）

（八女郡水害誌より）

河 川	288 ヶ所	552,827 千円、	道 路	279 ヶ所	224,015 千円
橋 梁	90 ヶ所	165,869 千円、	砂 防	1 ヶ所	484 千円
合 計	658 ヶ所	943,195 千円			



図-4.2 昭和 28 年洪水の様子

【出典：八女郡水害誌】

③ 平成2年洪水

6月下旬から九州南部にあった梅雨前線が北に移動し始め、7月2日の深夜から雷を伴って降り始めたが午前中にかけて豪雨となり、立花町全域と黒木町・矢部村の山間部に集中し、立花町の上辺春観測所では9時から10時にかけての時間雨量が78mmを記録し、24時間の最大雨量も365mmに達した。

被災市町村

大和町、高田町、瀬高町、山川町

被災総額

277億9000万円 床下浸水1,662戸 床上浸水484戸



図-4.3 平成2年洪水の様子

【出典：八女郡水害誌】

#### ④ 平成 24 年 7 月洪水

7 月 11 日～14 日にかけて、福岡県、熊本県、大分県を中心に記録的な豪雨が発生した。筑後川流域、矢部川流域、菊池川流域、白川流域における雨量観測所において 4 日間の期間降水量が 500 mmを超える記録的な降雨を観測し、1 時間雨量が 80 mmを超えた観測所が 14 地点に達した。

矢部川管内の黒木雨量観測所では、7 月 13 日 4 時から 14 日 14 時までの総降水量が 564mm となり、14 日の 9 時～10 時の 1 時間雨量が 94mm に達した。梅雨前線がもたらした豪雨により、矢部川水系矢部川の船小屋水位観測所（基準地点）において、観測史上最高の水位を記録する洪水が生じ、以下に示す甚大な被害が発生した。

特に全川にわたって計画高水位を上回り、矢部川本川 1 ヲ所で堤防が決壊し、柳川市などにおいて浸水被害が発生したのを始め、支川沖端川では 2 ヲ所で堤防が決壊し、一部区間では越水するなど、同様に柳川市などにおいて浸水被害が発生した。浸水被害は、矢部川沿川および沖端川沿川で 1,808 戸の家屋・事業所等が浸水した。

浸水戸数 : 床上 697 戸、床下 1,111 戸

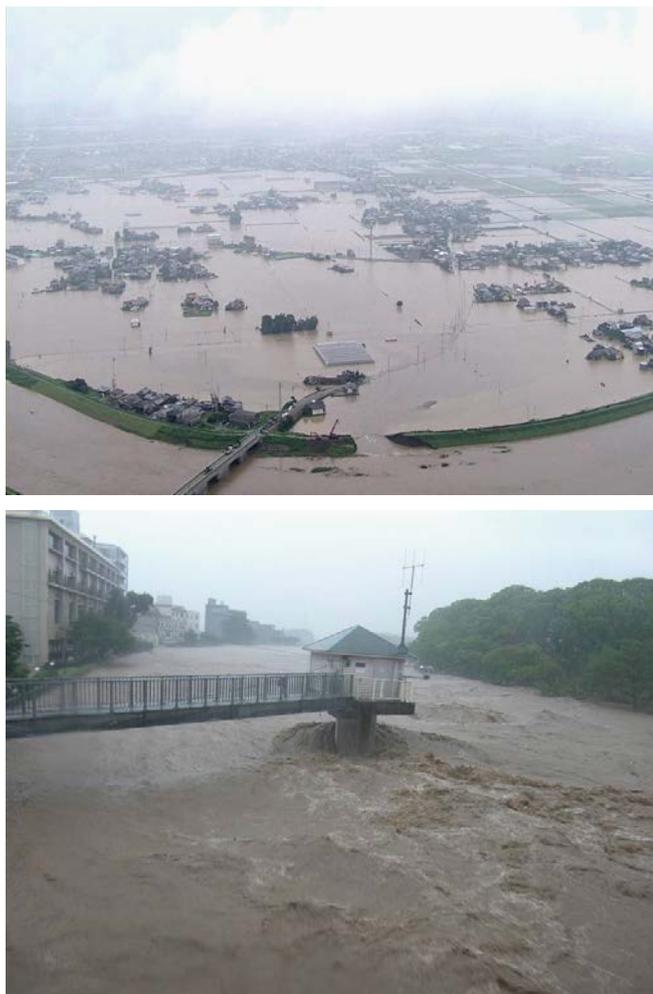


図-4.4 平成 24 年洪水の様子

表-4.2 (1) 既往洪水の概要

洪水名	洪水概要	被害状況
大正10年6月洪水	5日頃揚子江流域に発達し東シナ海に停滞した低気圧のため矢部川流域は飽和状態であった。この時、16日に揚子江に現れた低気圧は東進するに従って発達し、北九州は猛雨の包むところとなり、矢部川は多大の被害を被った。	浸水面積：13,504ha
昭和3年6月洪水	23日、25日、28日に発生した第1、第2、第3の低気圧の東進により三度の豪雨もたらされ、多大の被害が発生した。特に、揚子江流域に現れ、第1の低気圧と同じ経路を通った第2の低気圧は、勢力は弱かったが降水量が多く平地で200mm、山地で300mmに達した。	浸水面積：18,950ha
昭和21年7月洪水	本洪水は黒木において8日の雨量315.8mm、連続雨量361.3mmに達し、短時間に猛烈な強度の雨が矢部川全域に降り、全般にわたって漏水崩壊、溢水による多大の被害を生じさせた。	堤防欠壊、破堤箇所 左岸：山門郡、瀬高町、長田地先 右岸：山門郡、三橋町、棚町地先  浸水面積：10,845ha
昭和28年6月洪水	25日から29日にわたる4日間、梅雨前線は九州本土を南北に移動し、しかも初期から九州の中部と北部の間約100kmの狭い地域に振動し時には停滞しつつ活動するという例年と異なった様相を呈した。このため矢部川は多大の被害を被った。	浸水戸数 床下：15,896戸 床上：10,138戸 死者：26人
昭和44年7月洪水	6月28日以降、低気圧が九州北部に停滞し、南方洋上から暖かい湿った空気の流入も相まって、梅雨前線の活動が活発となり、矢部川流域では強い雨が降り続き、特に7月1日払暁には豪雨はピークに達した。 このため矢部川中・下流域では、異常出水を記録し、多大の被害を被った。	公共土木施設災害査定額 本川：21ヶ所、200百万円 支派川：65ヶ所、122百万円  一般災害額 2,542百万円

表-4.2 (2) 既往洪水の概要

洪水名	洪水概要	被害状況
平成2年6・7月洪水	<p>6月30日に九州南部にあった梅雨前線は台風6号が弱まった低気圧が九州西海上に接近するにつれ、活発化し九州中部から北部へと北上してきた。このため、7月1日夕方から雨脚が強まり、7月2日(舞鶴雨量観測所で230mm)、3日(柴庵雨量観測所で291mm)と矢部川流域に強い雨が降り、河川の増水が著しくなった。</p> <p>この洪水の特徴は、飯江川・白木川を中心に降雨が短期間に集中し、水位の急上昇をもたらしたことであり、矢部川は多大の被害を被った。</p>	<p>浸水戸数                      床上：484戸                      床下：1,662戸</p>
平成9年5月洪水	<p>14日の低気圧の東進に伴い、南西に延びる寒冷前線がゆっくり南下、前線に向かって暖かく湿った空気が流れこみ前線の活動が活発となった。</p> <p>このため、14日の朝に大雨となり、船小屋水位観測所で6.40mの最高水位を記録した。</p>	<p>浸水戸数                      床上：28戸</p>
平成9年8月洪水	<p>太平洋上にあった高気圧の勢力が弱まり、九州から東へ後退したため、不安定な天気となっていた。5日に黄海にあった低気圧が東へ遠ざかるとともに寒冷前線の南下で次第に強い雨が降り出し、前線の九州付近の停滞によって、6日の明け方頃まで強い雨が断続的に降った。</p> <p>このため、8月6日8時には船小屋水位観測所で6.45mの最高水位を記録した。</p>	<p>浸水戸数                      床上：7戸                      床下：7戸</p>
平成11年6月洪水	<p>28日梅雨前線が九州南部付近に停滞していたが、九州北部では夜になって弱い雨が降った程度であった。29日午前中に低気圧が対馬海峡を通過、これから延びる寒冷前線が午前中に九州北部を通過し、各地に雷を伴った非常に激しい雨をもたらした。</p> <p>このため、6月29日14時30分には船小屋水位観測所で最高水位6.05mを記録した。</p>	<p>浸水戸数                      床下：6戸</p>
平成24年7月洪水	<p>13日朝まで対馬海峡に停滞していた梅雨前線は、午後には朝鮮半島まで北上し、14日まで停滞した。前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため、大気の状態が不安定となり、13日は佐賀県、福岡県を中心に14日は福岡県、大分県を中心に非常に発達した雨雲が次々と流れ込んだ。</p> <p>このため、7月14日9時00分には船小屋水位観測所で最高水位9.76mのを記録した。</p>	<p>浸水戸数                      床上：697戸                      床下：1,111戸</p>

## 4-2 治水事業の沿革

### 1) 直轄改修工事以前

矢部川の治水築堤事業については、和銅 6 年 (713) 筑後国初代国司となった道君首名みちのきみのおびとが、矢部川の築堤工事を行って、良田を作ったという記録が残っている。

道君首名は、地域農民を動員して灌漑用溜池用の堤を築造し、開墾して耕作地を拡大した。河宮野地区で分流した複数の流れになっていたのを、支川を廃川とすることで、耕地化を図ったといわれている。

本格的に施工が行われたのは慶長年間(1600)以降であり、田中吉政の入府により治水工事が開始された。元禄 8 年(1695)に田尻総馬らの手によりその後の水害防備林となり、現在の公園となる「千間土居」が完成した。

大正 3 年から本格的に河川改修工事が開始され、矢部川第 1 期河川改修工事(福岡県)に着手し、昭和 2 年に完成した。その後、昭和 3 年の出水を契機に、昭和 4 年に矢部川第 2 期河川改修工事に着手し、昭和 14 年に完成した。また同年に船小屋左岸側に放水路が完成した。

また、昭和 21 年の出水を契機に、昭和 25 年に矢部川中小河川改修工事に着手し、昭和 48 年に完成している。その間、既往最大となる昭和 28 年の出水を契機に、昭和 31 年に日向神ダムの整備に着手、昭和 35 年に完成した。昭和 43 年には花宗川中小河川改修工事に着手している。

### 2) 直轄改修工事以降

その後、昭和 44 年 7 月の出水を契機に昭和 45 年に福岡県より直轄事業として引継ぎ、流下能力の向上のための築堤等の整備を実施している。その間、平成 2 年に瀬高堰が、平成 10 年には松原堰が完成した。

平成 19 年 11 月には、基準地点船小屋における基本高水のピーク流量を 3,500m<sup>3</sup>/s とし、そのうちの 500m<sup>3</sup>/s を上流の日向神ダムで調節して河道への配分流量を 3,000m<sup>3</sup>/s とする「矢部川水系河川整備基本方針」を策定したが、平成 24 年 7 月の九州の豪雨災害では、基本高水のピーク流量を超える洪水が発生し、社会及び地域経済に甚大な影響を与えたことから、平成 24 年 11 月に矢部川・沖端川激甚災害対策特別緊急事業が採択された。

表-4.3(1) 矢部川における治水事業の沿革

年号	西暦	事項
寛文 4年 弘化 元年	1664 1844	矢部川筋井堰は上流から数年～数十年間隔で両藩が交互に13ヶ所も築造している。
貞享 2年 宝暦 11年	1685 1761	花宗川筋井堰はこの間に立花藩によって築造されている。
明治 38年	1905	6月梅雨前線豪雨により、災害が発生する。
大正 2年 10年	1913 1921	矢部川第1期河川改修工事、10ヶ年計画作成（水田村船小屋から河口まで13km、大正3年から実施し、昭和2年竣工、事業費63万5800円） 〔現 筑後市船小屋〕 6月17日、矢部川、星野川が大洪水に見舞われ、死者17人、負傷者13人、家屋も流失、橋梁・道路は流失、決壊ヶ所が多く見られた。災害復旧工事にあたる。（明治14年に制定された災害復旧制度）
昭和 3年 4年	1928 1929	6月梅雨前線により災害が発生する。 尾島・船小屋停車場線が竣工する。〔現 筑後市、船小屋停車場線〕 田代・黒木線の道路改修工事が竣工する。〔現 黒木町、岩野・黒木線〕 矢部川第2期河川改修工事、10ヶ年計画作成（水田村船小屋から上妻村祈禱院まで工事長L=9km、事業費127万2000円 昭和14年竣工） 〔現 筑後市、船小屋停車場・水田線〕 矢部川の船小屋左岸側に放水路が完成し、その上に中ノ島橋が架設される。（RC橋 橋長L=50m） 〔現瀬高町、国道209号の矢部川の放水路の中ノ島橋〕
10年 21年 22年 23年 24年 25年 28年 35年 38年 43年 44年 46年 48年 51年 61年	1935 1946 1947 1948 1949 1950 1953 1960 1963 1968 1969 1971 1973 1976 1986	6月梅雨前線豪雨により災害が発生する。 7月梅雨前線豪雨により災害が発生する。 星野川災害対策工事（星野村、床固工 幅 W=2m、長さ L=31.8m、事業費 16万1000円）に着工、竣工する。 横山川災害対策工事（横山村、堰堤工 高さ H=3.8m、堰堤長 L=28.8m 事業費 20万1000円）に着工する。「23年度完成」 横山川災害対策工事（横山村、堰堤工 高さ H=7.2m、堰堤長 L=36m 事業費 142万9900円）に着工する。「24年度完成」 横山川災害対策工事（横山村、本堤翼工 護岸工 L=9m 事業費 29万9300円）に着工、竣工する。 矢部川中小河川改修工事（立花町白木川吐き口より工事長 L=33,000m、事業費 11億3000万円）に着工する。「48年度完成」 6月26日九州地方を襲った梅雨前線豪雨より、河川は氾濫し大洪水となり甚大な被害を被り、災害復旧にあたる。 被災の状況は、死者29人、重・軽傷者209人、家屋全壊・流失154戸、家屋半壊・床上浸水2,557戸、床下浸水9,336戸、非住宅被害933戸、罹災者総数63,042人。（八女地方事務所集計） 矢部川 河川災害助成事業（工事長 L=14,963m 事業費 9億7600万円）に着工する。「35年完成」 日向神ダムが完成する。「3月完成」 38年災 梅雨前線豪雨による災害が発生する。 花宗川中小河川改修工事（筑後市、工事長 L=7,350m 事業費 82億2500万円）に着工する。 山ノ井川災害助成工事（筑後市、総工事長 L=3,450m 河川幅 W=11~25m 総事業費 4億7200万円）に着工し、47年の大雨で上流側堤防が決壊したため関連工事として、工事長 L=590mを工期を延長し施工する。「50年完成」 矢部川河川改修（広域基幹）工事（八女市・立花町、築堤・護岸・橋梁・井堰工 工事長 L=6,700m）に着工する。 矢部川中小河川改修工事広瀬堰（筑後市・瀬高町、事業費6億7,700万円）に着工する。 48年災 6号台風、梅雨前線豪雨により災害発生する。 51年災 梅雨前線、17号台風に伴う豪雨による災害発生する。 山の井川 河川局部改良工事（八女市、築堤・護岸・橋梁・井堰工、工事長 L=1,300m 事業費 6億6000万円）に着工する。「11年度完成」

表-4.3(2) 矢部川における治水事業の沿革

年号	西暦	事項
平成 2年	1990	7月2日梅雨前線豪雨により、八女土木管内、特に立花町では時間雨量が79mmを記録し、河川は氾濫し松尾地区では地すべりが発生し甚大な被害を被った。 辺春川 河川災害助成工事（立花町、工事長 L=10,890m、事業費 96億2000万円）に着工する。 白木川 河川災害助成工事（立花町、工事長 L=9,510m、事業費 77億3000万円）に着工する。
3年	1991	辺春川 河川改修（広域基幹）工事（立花町、築堤・護岸・橋梁・井堰工 工事長 L=1,730m）に着工する。 9月14日台風17号、27日19号と北部九州を連続して直撃し、家屋や農産物、特に山林立木に甚大な被害を受ける。
6年	1994	笠原川 地方特定河川環境整備工事（黒木町、築堤・修景工 工事長 L=260m、事業費 1億6000万円）に着工する。「8年度完成」 山の井川 郷土の水辺整備工事（筑後市、築堤・護岸・修景工 工事長 L=500m、事業費 4億4000万円）に着工する。「12年度完成」 星野川 ふれあい護岸公園（上陽町、北川内公園下の河川右岸流域 L=527mの河川敷）が竣工する。
8年	1996	筑後広域公園事業（筑後市、瀬高町）が認可される。 矢部川の船小屋周辺に、面積194.7ha（管内121.7ha） 事業費100億円 「18年完成（16年一部開園）予定」
11年	1999	筑後広域公園「起工・記念植樹」式を柳川土木・八女土木と筑後市・瀬高町の実行委員会により矢部川の中の島公園で実施する。
24年	2012	7月14日梅雨前線豪雨により、特に黒木雨量観測所では時間雨量が94mmを記録し、柳川市では堤防が決壊し甚大な被害を被った。 矢部川・沖端川激甚災害対策特別緊急事業（矢部川・沖端川 工事長 L=23,200m、事業費 195億円）に着工する。

## 第5章 水利用の現状

### 5-1 水利用の変遷と現状

河川水の利用については、そのほとんどが農業用水に利用され、約 13,000ha の農地を潤している。都市用水や工業用水の利用はわずかであり、発電用水については、洗玉・木屋・新矢部川・大淵の4ヶ所の発電所により総最大出力約 15,000kW の電力が供給されている。

船小屋地点から下流の既得水利としては、農業用水として、5.066m<sup>3</sup>/s の許可水利および約 4,700ha の慣行水利、漁業雑用水として3件の許可水利がある。

表-5.1 矢部川水系における水利権一覧表

水利使用目的	件数	水利権量計 (m <sup>3</sup> /s)	かんがい面積 (ha)	備考
農業用水	許可	11	58.3450	8,713.79
	慣行	34	24.6830	4,430.36
	合計	45	83.0280	13,144.15
工業用水	7	0.1340	—	
発電用水	4	21.1700	—	発電最大出力 15,340kW
水道用水	1	0.0094	—	
その他	4	0.1670	—	
合計	61	104.5084		

【出典：九州地方整備局資料】

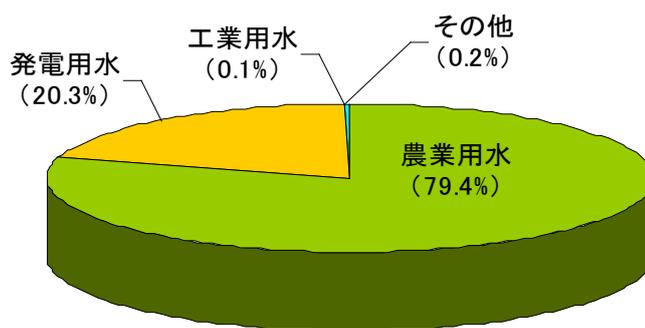


図-5.1 矢部川水系の水利用の割合

※上流の廻水路で迂回する分の水利権は除く

筑後平野における農業用水の利用は、天井川である特性を活かし、筑後川支川の花宗川や矢部川派川の沖端川等を経由してクリーク網へと補水されている。

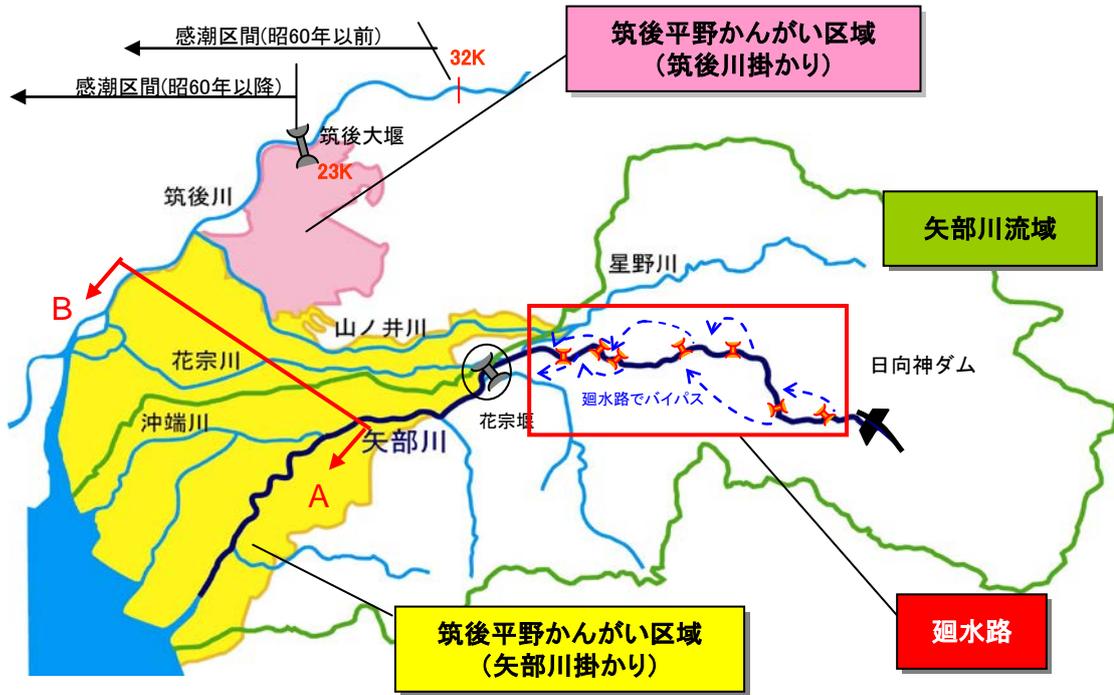


図-5.2 筑後平野のかんがい区域

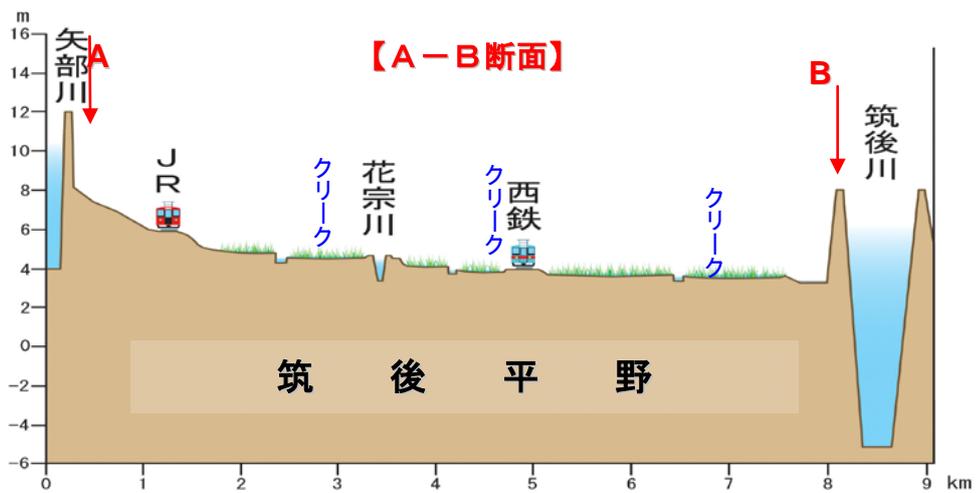


図-5.3 筑後平野の横断模式図

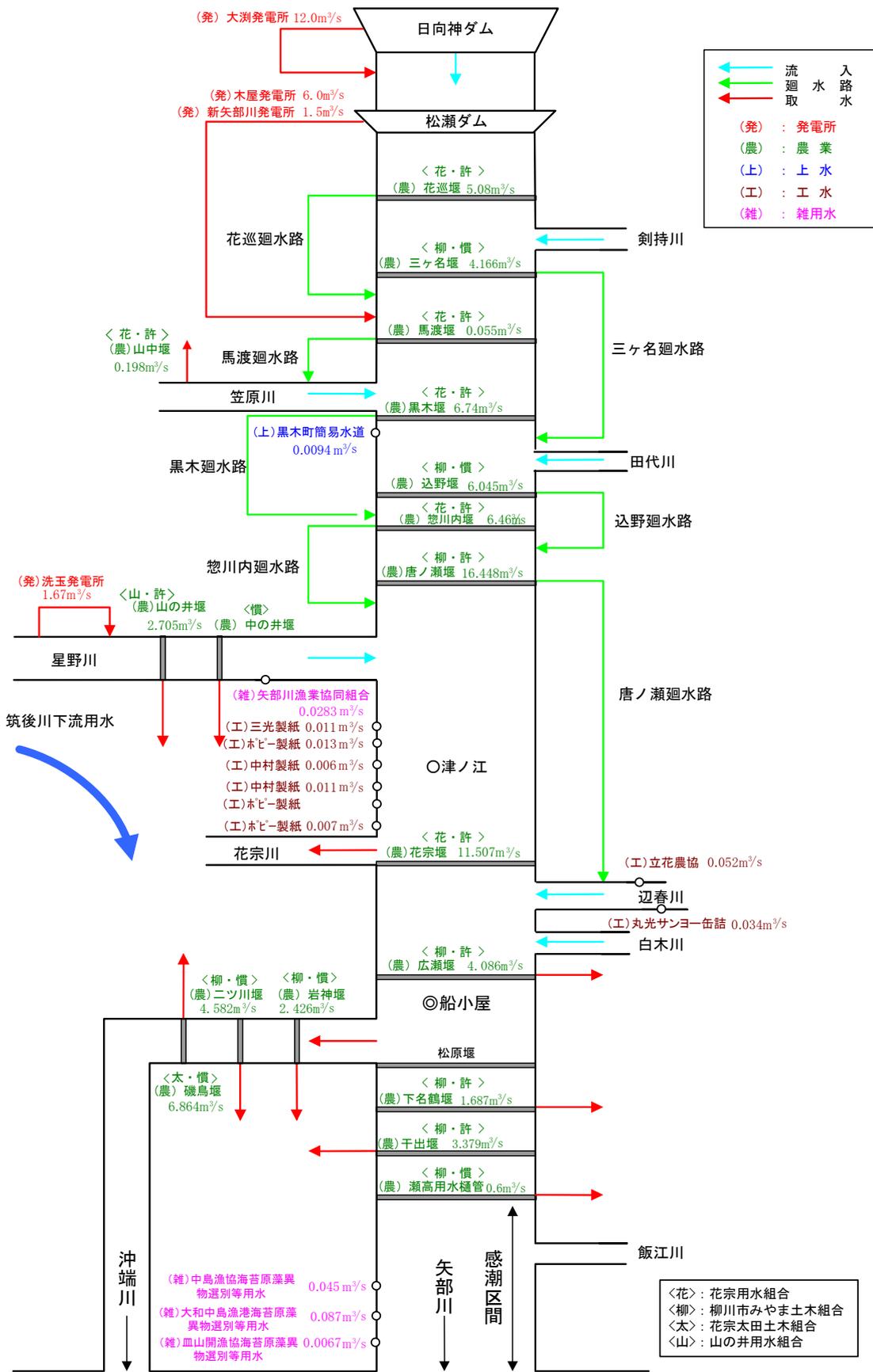


図-5.4 矢部川水系の主な水利用の現況模式図

矢部川の水利用における特徴は、廻水路やクリークといった独特の複雑で高度な水利慣行が、今なお維持されていることである。上流部に位置する「廻水路」は、藩政時代、矢部川をはさんで久留米藩・柳川藩がそれぞれ自ら設けた堰の水を、他藩に落とさないようバイパスを設けたもので、当時の激しい水争いの歴史を物語っている。

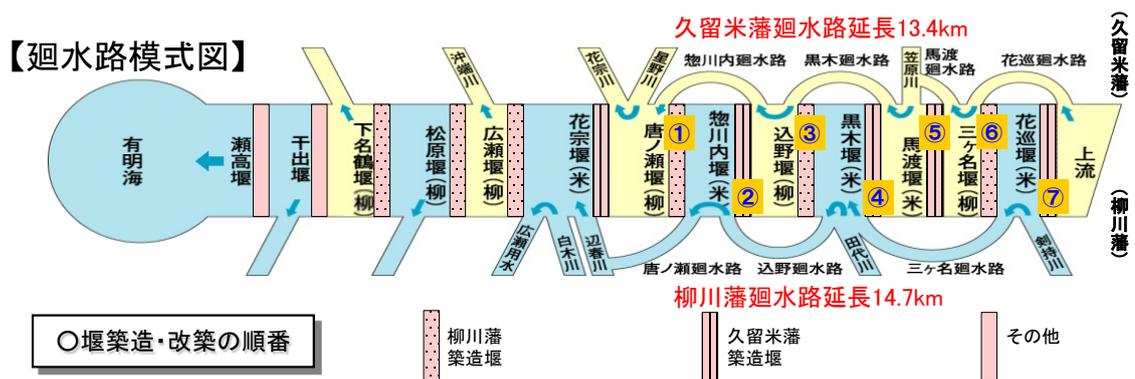


図-5.5 矢部川筋井堰及び廻水路模式図

【出典：矢部川の歴史 水利編 加筆】



写真-5.1 廻水路の状況（黒木廻水路）

一方、下流部では、広大な筑後平野の稲作に必要な水を確保するため、低平地の特性を活かした「クリーク」が網の目のように発達し、各々の水田で取水・還元が繰り返される「反復利用」が行われている。また、矢部川等からの取水は、操作方法、取水位置等において不文の慣行が成立し、現在においても守られている。なお、かぎりある河川水を有効に利用するため、上流地区が水を使わないかんがい期前に、下流域へ通水し、クリークに貯留する「春水」と言われる<sup>はるみず</sup>ゆずり合いの慣行も存在している。



図-5.6 下流のクリーク地帯及び春水配水区域

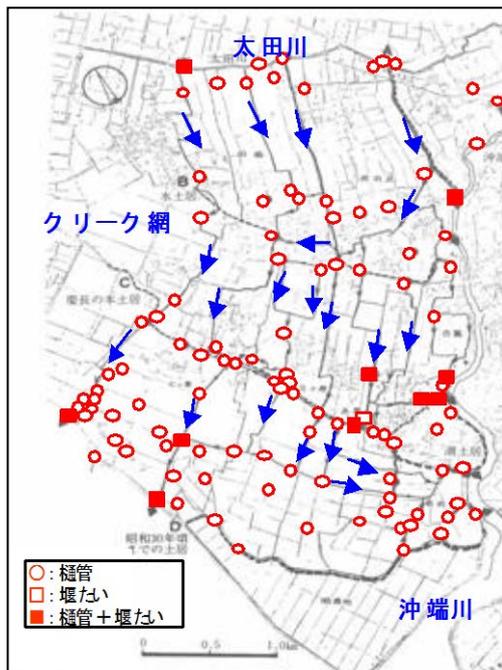


図-5.7 クリーク網

出典：「水の造形」加藤仁美著 p117

作図 坂本紘二

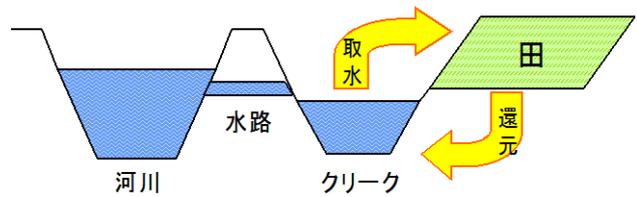


図-5.8 クリークの反復利用のイメージ



写真-5.2 花宗川の配水施設

## 5-2 渇水被害と渇水対応の現状

近年における渇水被害としては平成6年が挙げられるが、平成6年渇水時の状況は以下のとおりであり、大きな被害には至らなかった。

### ○平成6年渇水時の状況

北部九州地域の平成6年の梅雨明けは、平年より約18日早い7月1日であり、雨量観測所黒木の期間中の降雨量は、206mmと少なく、7月以降9月までも晴天猛暑が続き3ヶ月の総降雨量は214mmと平年値の約25%と少なく、大渇水となったものである。

渇水の対応として、渇水調整協議会を開催し、日向神ダムからの放流等の対策を行っている。

日向神ダムでは7月はじめから制限水位以下の農業用水の放流を行っていたが、7月23日には農業用水の7,300千 $m^3$ を使い果たしている。その後、発電の死水容量の放流を行ったが、8月1日には死水容量1,500千 $m^3$ を使い果たしている。その後、8月24日から9月5日まで堆砂容量800千 $m^3$ から緊急放流を行うなどの対応を行うことにより渇水を乗り切っている。農水の被害状況としては、以下のとおりとなっている。

#### 花宗用水組合（花宗川上流沿川の農地用水管理）

花宗川筋の全域において、7月19日から9月30日まで配水制限を行った。流量の配分施設の支配面積によって調整した。被害は特になし。

#### 柳川市外3ヵ町土木組合（現柳川市みやま土木組合）

##### （沖端川沿川及び矢部川左岸の農地用水管理）

7月7日から10月15日まで各堰で毎日水位を測定し、地区の状況に応じて随時調整した。被害は柳川市 両開（大浜町、有明町、吉富町）および橋本町一帯において、収穫に1割程度の減少が見られた。

#### 花宗太田用水組合（花宗川下流沿川の農地用水管理）

矢部川からの取水量がないため、規則的な取水制限はできなかった。そのため、上流優先で取水が行われた。柳川市の昭代地域および大川新田の一部で黒乾、白乾状態が見られたが、その後の降雨で枯死までいならず、収穫に1割程度の影響が見られた。

渇水時においては、互譲の精神による水利用調整やクリークの高度利用により、大きな被害は回避されているものの、平成6年渇水の翌年には、稚アユの遡上量に減少が見られたことから、稚アユ放流量の増量対策が行われるなど、必ずしも河川環境上望ましい流量が確保できていたとは言えない。

表-5.2 近年の日向神ダム緊急放流の実施事例

実施時期	目的	実施期間	補給量
平成14年6月～平成14年9月22日	農水補給	92日間	17,800千m <sup>3</sup>

表-5.3 渇水年の日向神ダム死水放流状況

年度	月日	日数	放流量(m <sup>3</sup> )	期間中平均水位	月雨量(mm)
S 39	9/23～25	3	546,000	274.67	81
S 42	9/4～30	27	2,810,000	267.57	9
	10/1～17	17	1,080,000	267.57	101
S 43	6/2～29	27	2,850,000	269.88	93
S 44	9/19～30	11	2,120,000	269.86	148
	10/1～12	11	1,200,000	269.64	49
S 52	9/18～30	12	2,892,000	268.49	113
S 53	9/5～10/10	35	3,156,192	268.50	49
S 57	6/28～7/8	13	478,000	273.65	91
H 2	9/2～19	18	4,787,000	268.18	229
H 6	7/23～31	8	2,877,900	270.69	91
	8/1～30	30	29,255,000	269.08	53
	9/1～21	21	2,452,022	266.15	164

○渇水調整協議会

矢部川には平成6年渇水まで渇水調整協議会が設立されていなかったこと、ダムの堆砂容量はもともと利水目的には入っておらず、この利用にあたっては河川管理者の判断が必要であることなどから、渇水時における関係利水者間の水利使用の調整を円滑に行い、合理的な水利使用の推進を図ることを目的として、平成6年8月23日に渇水調整協議会が設立された。

渇水調整協議会委員は下表に示すとおりである。

表-5.4 矢部川水系渇水調整協議会委員名簿

関係行政機関	委 員
九州地方整備局	筑後川河川事務所長 筑後川河川事務所 事業対策官
福岡県	南筑後県土整備事務所柳川支所長 八女県土整備事務所長 日向神ダム管理出張所長 筑後農林事務所長 有明海研究所長 内水面研究所長
みやま市	市長
八女市	市長
筑後市	市長
柳川市	市長
大木町	町長
大川市	市長

【出典：矢部川水系渇水調整協議会規約】

渇水調整協議会は、定例会を毎年1回、原則として5月（田植え時期前）に開催し、その他会長が必要と認めたとき、若しくは委員の要請があった場合に開催される。

渇水調整協議会の開催状況を以下に示す。

表-5.5 矢部川水系渇水調整協議会の開催状況

年 度	開催日	会 議	決定内容
平成6年度	8/23	設立総会、第1回協議会	・かんがい向けに死水容量80万m <sup>3</sup> を放流決定
平成10年度	9/21	第2回協議会	・かんがい向けに死水容量1,500千m <sup>3</sup> を放流決定
平成14年度	8/27	第1回幹事会	・情報交換
	9/2	第2回協議会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
	9/5	第2回幹事会	・情報交換
	9/9	第3回協議会、第3回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流継続することを決定
	9/18	第4回幹事会	・節水調整を行い、有効貯水容量が0になるまで放流する。 ・貯水量が0になった以降は流入量＝放流量とする。
	10/11	第5回幹事会	・渇水調整終了
平成16年度	6/24	第1回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
平成17年度	6/13	第1回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
	6/21	第2回委員会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流継続することを決定 ・貯水量0になった場合は死水容量が活用できるよう福岡県が調整を図る。
	7/5	第2回幹事会	・渇水調整終了
	9/2	第3回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
平成20年度	8/13	第1回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
平成21年度	6/23	第1回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
	9/9	第2回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定
	9/17	第3回幹事会	・節水調整を行い、かんがい向けに有効貯水容量を放流決定

※決定事項のなかった定例会は記載していない。

### 5-3 水利用に係わる今後の方向性

矢部川水系では、上水道用水、工業用水、発電用水、農業用水、その他雑用水が取水されている。用水毎の水需要の動向は以下のとおりである。

#### ○上水道用水

矢部川での上水道用水は、黒木町の簡易水道 1 件、0.0094m<sup>3</sup>/s が取水されている。福岡県資料「防災及びエネルギー・水安定供給調査特別委員会資料 福岡県における水事情について 平成 25 年 7 月」によると、今後、筑後地域での上水道用水の需要は増加傾向と予測されている。

#### ○工業用水

矢部川での工業用水は、7 件、0.134m<sup>3</sup>/s が取水されている。福岡県資料「防災及びエネルギー・水安定供給調査特別委員会資料 福岡県における水事情について 平成 25 年 7 月」によると、今後、筑後地域での工業用水の需要は増加傾向と予測されている。

#### ○発電用水

矢部川での発電用水は、4 件、21.17m<sup>3</sup>/s が取水されている。日向神ダム建設後、出力規模、使用水量ともほとんど変化していない。また、今後新たな発電所建設等も予定されていないことから、矢部川における発電用水の需要の大幅な増加はないものと考えられる。

#### ○農業用水

矢部川での農業用水は、許可水利 11 件、最大取水量合計 58.345m<sup>3</sup>/s が取水されている。福岡県資料「防災及びエネルギー・水安定供給調査特別委員会資料 福岡県における水事情について 平成 25 年 7 月」によると、今後、筑後地域での農業用水の需要は減少傾向と予測されている。

## 第6章 河川状況と水質

### 6-1 河川流況

矢部川の主要地点の船小屋における昭和53年から平成24年までの過去35年間の平均低水流量は4.62m<sup>3</sup>/s、平均渇水流量は2.53m<sup>3</sup>/s、10年に1回程度の規模の渇水流量は1.10m<sup>3</sup>/sとなっている。

表-6.1 船小屋地点流況表（昭和53年～平成24年）

No.	年	豊水 (m <sup>3</sup> /s)	平水 (m <sup>3</sup> /s)	低水 (m <sup>3</sup> /s)	渇水 (m <sup>3</sup> /s)	最小 (m <sup>3</sup> /s)	年平均 (m <sup>3</sup> /s)
1	昭和53年	① 7.25	4.90	3.28	1.85	1.11	① 6.88
2	昭和54年	12.29	7.62	5.31	2.26	② 0.79	21.41
3	昭和55年	28.18	12.48	7.47	4.02	1.37	42.10
4	昭和56年	19.38	12.98	6.36	3.90	3.43	23.80
5	昭和57年	12.11	8.08	5.17	2.49	1.69	22.68
6	昭和58年	21.48	10.98	6.65	4.31	3.08	23.22
7	昭和59年	11.59	6.35	4.70	3.10	2.31	16.20
8	昭和60年	18.15	8.80	5.48	3.08	2.13	27.50
9	昭和61年	13.58	6.72	4.44	2.71	1.56	24.82
10	昭和62年	21.90	11.96	7.54	4.41	2.78	29.12
11	昭和63年	15.96	7.08	4.04	2.27	1.52	18.52
12	平成元年	19.68	9.35	4.37	2.43	1.76	18.80
13	平成2年	15.72	7.17	3.91	2.46	2.01	19.50
14	平成3年	24.92	7.58	4.44	2.36	1.97	28.22
15	平成4年	15.97	6.42	3.64	2.20	1.95	13.19
16	平成5年	31.05	11.32	5.63	2.93	1.78	43.47
17	平成6年	② 8.24	4.80	① 1.96	① 0.71	① 0.51	6.97
18	平成7年	11.18	③ 4.79	② 2.62	② 1.01	③ 0.83	② 20.68
19	平成8年	10.17	6.09	4.47	2.14	1.46	18.35
20	平成9年	19.67	10.01	6.32	3.82	3.31	35.01
21	平成10年	23.53	12.24	3.92	2.50	1.17	22.44
22	平成11年	12.60	① 4.66	③ 2.83	③ 1.10	0.84	22.59
23	平成12年	12.04	6.87	4.58	1.95	1.43	13.93
24	平成13年	11.81	6.57	4.40	1.79	1.29	21.63
25	平成14年	12.69	6.26	3.83	2.42	2.04	③ 13.00
26	平成15年	19.04	8.73	5.13	2.91	1.96	22.24
27	平成16年	18.35	7.55	4.81	2.17	1.38	20.73
28	平成17年	11.65	6.72	3.77	2.20	1.99	14.16
29	平成18年	21.24	9.40	5.12	2.65	2.00	25.71
30	平成19年	③ 8.57	② 4.70	3.26	1.80	1.57	17.56
31	平成20年	13.03	6.97	4.35	2.51	1.89	16.79
32	平成21年	11.37	5.80	4.27	2.83	2.45	20.91
33	平成22年	15.70	7.89	4.67	2.19	1.77	20.08
34	平成23年	15.04	7.24	4.73	2.79	2.28	25.92
35	平成24年	13.79	6.90	4.32	2.36	1.47	27.29
近年10ヵ年 (H15-H24)	最大	21.24	9.40	5.13	2.91	2.45	27.29
	最小	8.57	4.70	3.26	1.80	1.38	14.16
	平均	14.78	7.19	4.44	2.44	1.88	21.14
全資料 (S53-H24)	最大	31.05	12.98	7.54	4.41	3.43	43.47
	最小	7.25	4.66	1.96	0.71	0.51	6.88
	平均	15.97	7.83	4.62	2.53	1.80	21.87
1/10 (S53-H24)	4位/35年	10.17	4.80	3.26	1.79	0.84	13.19
	3位/35年	8.57	4.79	2.83	1.10	0.83	13.00

## 6-2 河川水質

矢部川水系における水質環境基準の類型指定は、表-6.2、図-6.1に示すとおりである。矢部川本川の水質環境基準点である浦島橋、船小屋、上矢部川橋における水質を、BOD75%値で見ると、近年は環境基準を満足している。また、日向神ダムについては、COD75%値で見ると、近年は概ね環境基準程度で推移している。

表-6.2 矢部川における環境基準類型状況

水域の範囲	類型値	達成期間	環境基準点	指定年月日	摘要	
矢部川	瀬高堰上流	A	イ	船小屋、上矢部川橋	平成18年3月31日見直し（昭和47年4月20日）	福岡県
	瀬高堰下流	B	イ	浦島橋		
楠田川	B	ハ	三開堰			
飯江川	高田堰上流	A	イ	古賀橋		
	高田堰下流	C	イ	丁字橋		
沖端川	磯島堰上流	A	イ	磯島堰		
	磯島堰下流	C	ハ	三明橋		
塩塚川	B	イ	晴天大橋			
白木川	A	イ	山下橋			
辺春川	A	ハ	中通橋			
星野川	A	イ	星野川橋			
日向神ダム	湖沼A	イ	ダムサイト			

河川類型値：A=BOD濃度 2mg/l以下 B=BOD濃度 3mg/l以下 C=BOD濃度 5mg/l以下

湖沼類型値：A=COD濃度 3mg/l以下 B=COD濃度 5mg/l以下 C=COD濃度 8mg/l以下

達成期間：イ=直ちに達成 ロ=5年以内で可及的すみやかに達成 ハ=5年を超える期間で可及的速やかに達成

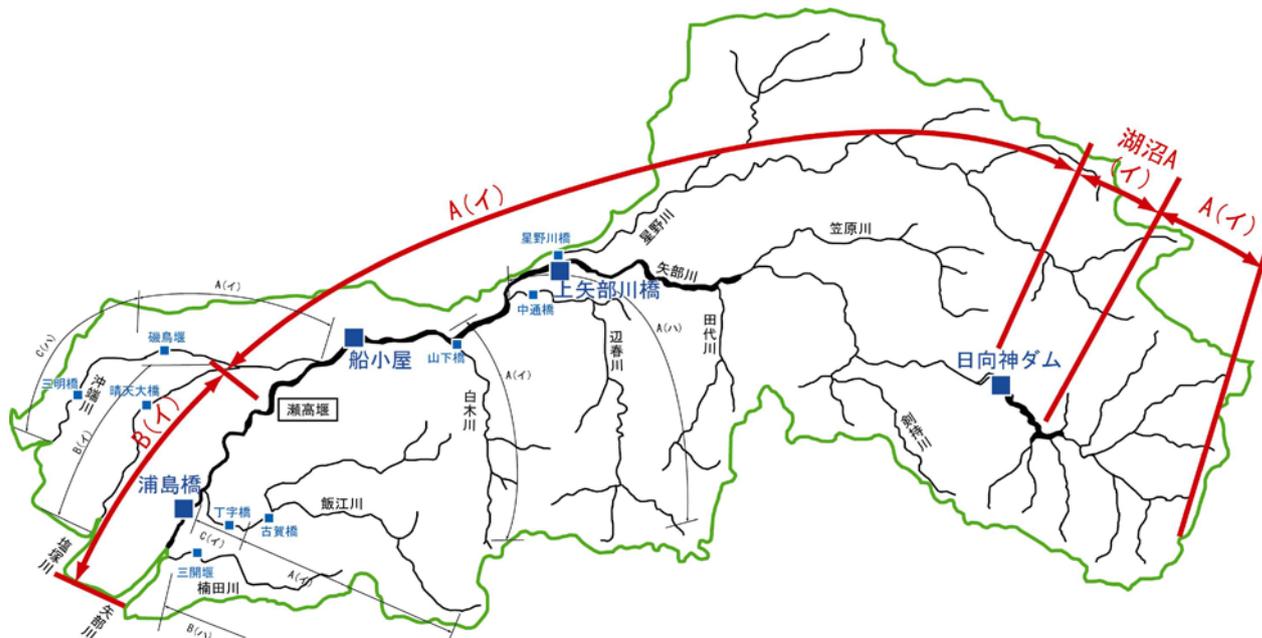
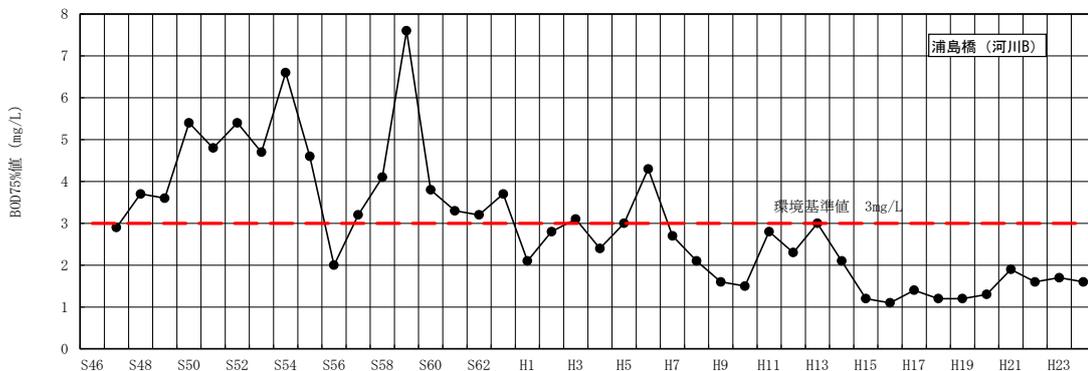
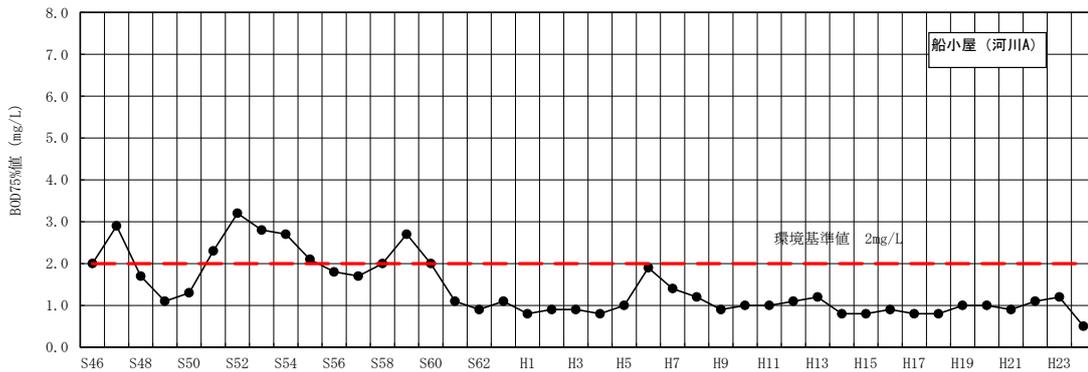
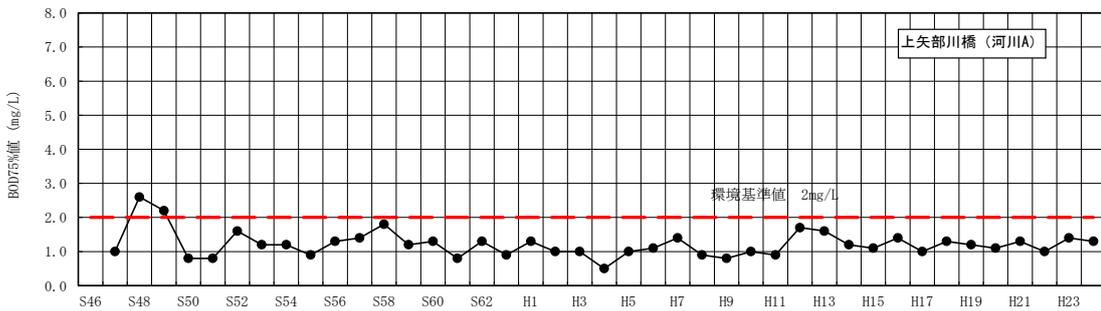
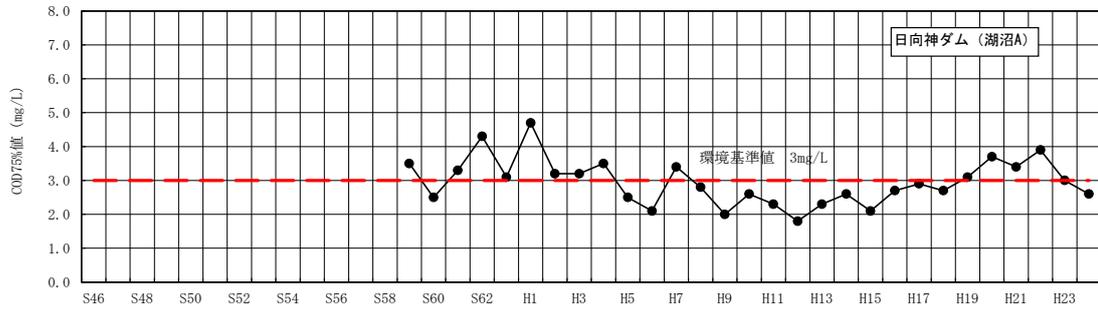


図-6.1 矢部川水系における環境基準類型指定状況



(注) 船小屋、浦島橋 (国土交通省測定) のBOD75%値は年で、上矢部川橋 (福岡県測定) のBOD75%値および日向神ダムのCOD75%値は年度で整理。

図-6.2 矢部川本川における水質経年変化

## 第7章 河川空間の利用状況

### 7-1 河川の利用状況

矢部川は現在、水遊び・釣りをはじめとする各種レクリエーションに利用され、特に夏は多くの人を訪れるところである。

中流域にある船小屋温泉は古くからの温泉地であり観光客で賑わう。この船小屋温泉付近にある中ノ島公園は矢部川の清らかな流れと、生い茂るクスノキ林で矢部川の中でも最も利用者が多いところである。

上流にかけて、矢部川はアユ釣りの宝庫として、多くの釣り客が訪れ、さらに上流の日向神ダムは、その見事な紅葉とダム周辺のキャンプ場として、訪れる人が多いところである。

矢部川はまた生活の場にもなっており、下流の中島地区は、有明海をはじめとする漁業の町で、矢部川は舟溜まりとして活気を呈している。

## 7-2 河川敷の利用状況

矢部川の河川空間は、中流区間の一部を除いて、高水敷幅が狭く、利用には制約がある。

占用状況としては、公園として4件約7.4ha、運動場として2件約0.6ha、また採草地として2件約7.7haが利用されている。

平成21年度に矢部川の直轄管理区間で実施した「河川水辺の国勢調査（河川利用実態調査）」による河川空間利用者数は年間約29万人と推定されている。

図7-1に示すように矢部川における利用形態は、散策、釣り、水遊びなど多岐にわたって多くの人々に利用されている。特徴として、利用場所が高水敷、堤防で約7割を占めていることが挙げられ、豊かな緑をもつ矢部川の河川空間が沿川住民・観光客にとって手軽に自然と触れ合える場として利用されていることを示している。

矢部川の利用状況をみると、船小屋の中ノ島公園を中心として、瀬高堰より上流に集中しており、夏の水遊び、魚釣りをはじめとし、バーベキュー・ゲートボール等に、また遠足、写生大会の場として利用されている。

矢部川の清い流れ、豊かな緑をもつ河川空間は、沿川住民・観光客にとって手軽に自然とふれあえる場として四季を通して住民の憩い・やすらぎ・レクリエーション等の親水空間として利用されている。

表-7.1 河川敷占用状況

種類	名称・種別	許可受者	面積 (㎡)	位置
公園	筑後広域公園	福岡県知事	15,601.0	右岸 12/9～13/7
	中ノ島公園	福岡県知事	50,654.0	左岸 15/0～16/0
	(多目的広場)公園	筑後市長	6,676.1	右岸 14/8～15/1 右岸 15/7～16/0
	(今福)親水性公園	みやま市長	1,172.0	(飯江川)左岸 1/4
運動場	矢原運動広場	八女市長	5,764.5	右岸 19/1～19/3
	グラウンド	八女市長	709.9	右岸 18/8
採草地	採草地	みやま市長	45,025.0	左岸 7/8～9/2
	〃	柳川市長	31,569.0	右岸 8/42～9/12

【出典：河川利用実態調査 (H22)】

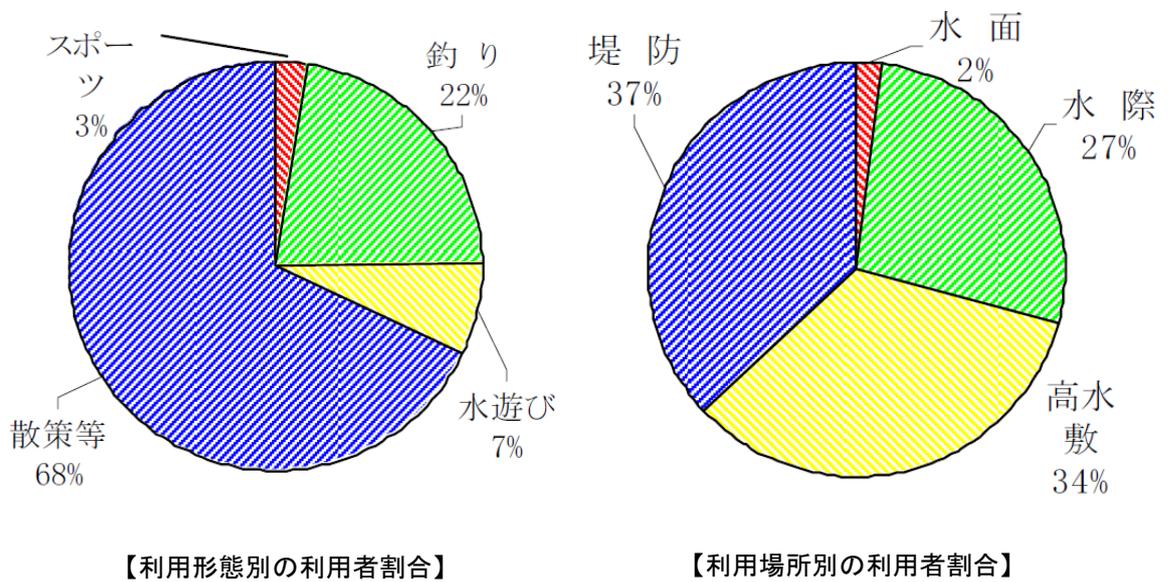


図-7.1 河川利用実態調査結果

【出典：河川利用実態調査（H22）】



図-7.2 河川区分ごとの河川利用状況



## 8. 河道特性

矢部川は、その源を福岡、大分、熊本の3県にまたがる三国山（標高994m）に発し、日向神峡谷を流下し、中流域において支川星野川を合わせ、さらに辺春川、白木川、飯江川等を合わせながら筑後平野を貫流し、下流域において沖端川を分派して有明海に注ぐ、幹川流路延長61km、流域面積647km<sup>2</sup>の一級河川である。

河床勾配は、上流部では約1/80～1/200程度と急勾配であり、中流部で約1/350～1/700程度、下流部では約1/2,000～1/10,000程度と緩勾配となっている。

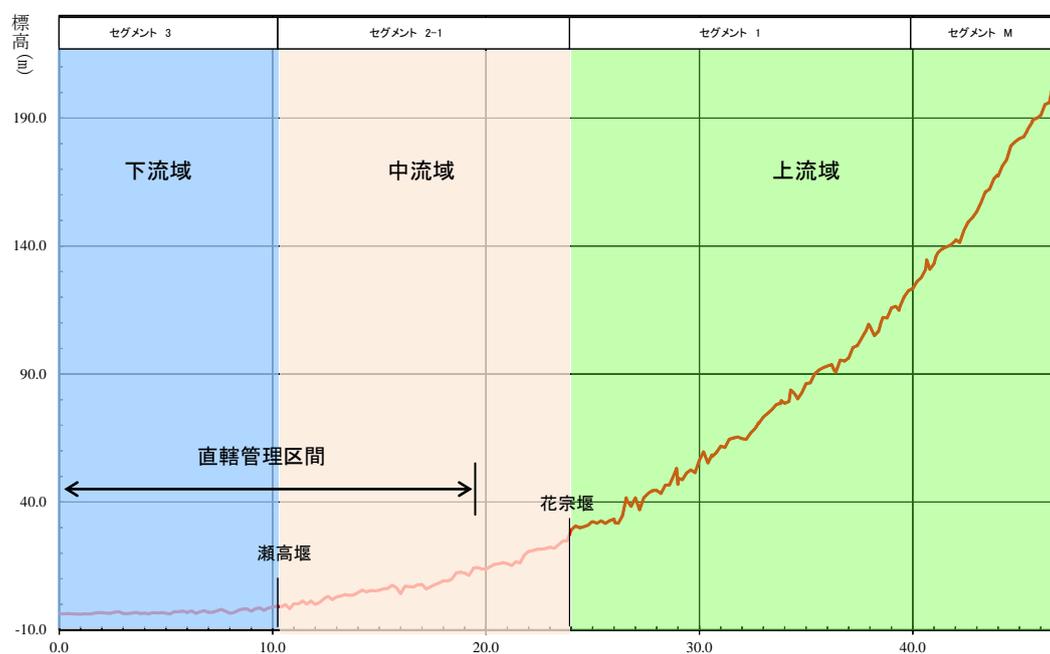


図-8.1 矢部川の河床勾配（最深河床高）



37/600 付近（山間部）  
河床は岩が主となり、瀬・淵が連続する。  
山間部を蛇行しながら流下する。



24/800 付近（氾濫原区間）  
河床は礫が主となり、平瀬を形成している。  
流れは速く川幅は変化に富み細流等がみられる



15/300 付近（基準地点：船小屋）  
河床は礫が主となり、瀬・淵が連続する。  
河畔林が多く、多様な生息環境を有する。



10/400 付近（湛水区間）  
堰が連続し湛水している区間。流れも穏やか  
で安定している。



5/400 付近（飯江川合流点）  
感潮区間でガタ土が堆積している。汽水域  
の干潟にはヨシ群落が繁茂している。



0/000 付近（河口）  
ガタ土が堆積する干潟区間である。有明海  
特有の生物が生息する。

図-8.2 矢部川の河道状況

## 第9章 河川管理の現状

### 9-1 河川管理区間

矢部川は、幹川流路延長 61km の一級河川であり、本川の河口より 19.4km 区間と飯江川 3.6km、楠田川 0.2km の合計 23.2km を国が管理している。

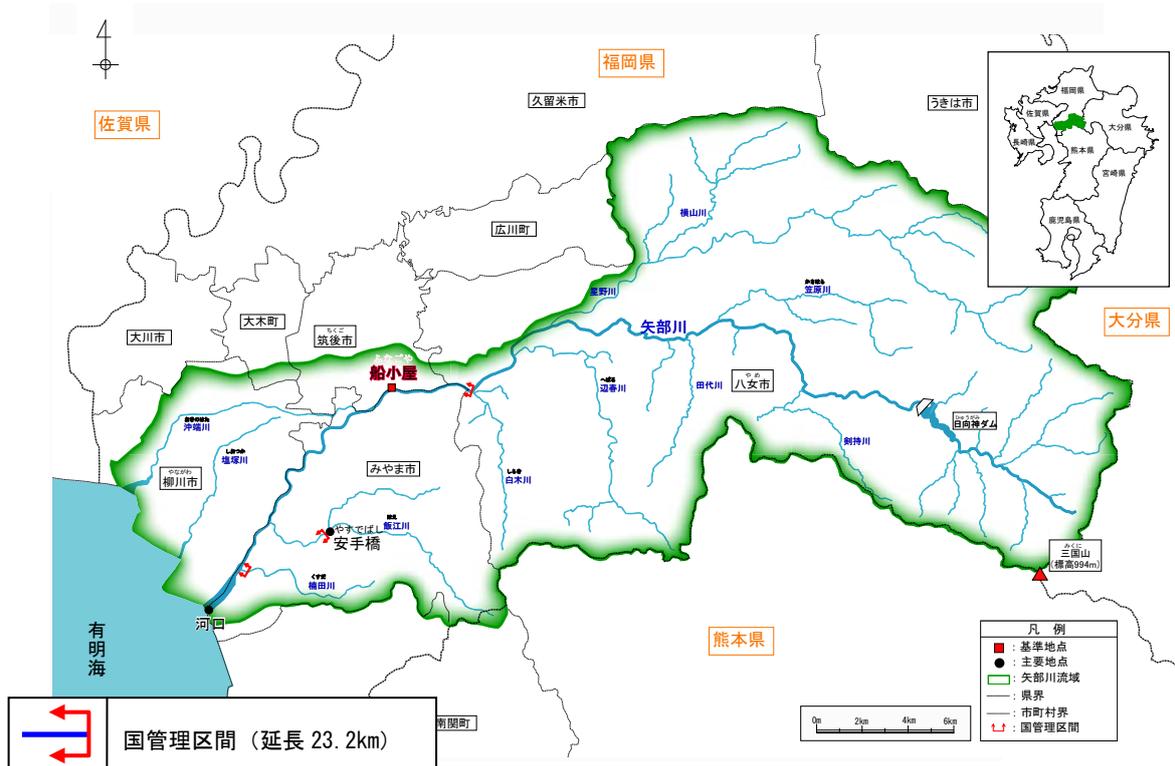


図-9.1 矢部川水系の国管理区間

表-9.1 矢部川水系の国管理区間

河川名	上流端※	下流端	延長
矢部川	左岸：福岡県山門郡瀬高町大字 廣瀬字堤谷 739 番の 2 地先 右岸：八女市大字矢原字二ノ辻 561 番の 1 地先	海に至る	19.4km
飯江川	福岡県山門郡瀬高町大字太神字 中島 2727 番の 3 地先の町道橋	矢部川への合流点	3.6km
楠田川	左岸：福岡県三池郡高田町大字江浦字 立花 1762 番の 1 地先 右岸：福岡県三池郡高田町大字徳島字 安政 1067 番地先	矢部川への合流点	0.2km
河川計			23.2km

※官報で告示された時点の地名で表示しており、現在の地名とは異なるものもある。

国管理区間の河川区域面積は、合計 537.98ha であり、そのうち官有地は 95.5%を占め、民有地は 4.5%が使用されている。

内訳は、低水敷が約 44.4%、堤防敷が約 30.3%、高水敷が約 25.3%となっている。

表-9.2 国管理区間内の管理区域面積 (単位 : ha)

矢部川 水系	低水敷 (1号地)		堤防敷 (2号地)		高水敷 (3号地)		計	
	官有地	民有地	官有地	民有地	官有地	民有地	官有地	民有地
面積 (ha)	238.6	0.0	163.11	0.0	112.19	24.08	513.9	24.08
比率 (%)	100	0	100	0	82.3	17.7	95.5	4.5

## 9-2 河川管理施設

堤防や護岸は、経年的な老朽化や不同沈下、降雨・浸透・洪水・地震等の自然現象、車両乗り入れ等人為的な影響を受けることにより、変形やクラック等が発生し、放置すると洪水時の変状拡大や大規模な損傷に繋がる。また水の浸透等によって、クラックや堤体土質のゆるみの進行に繋がり、堤防の弱体化をまねく恐れがあり、矢部川では、堤防の変状や漏水とともに護岸の老朽化が確認されており、適切な維持管理が必要である。

また、矢部川では堰、樋門・樋管、排水機場など「57」の施設があり、これらの施設は、昭和40年（1965年）～昭和60年（1985年）代に築造されたものが多い状況である。

洪水、高潮等に対して所要の機能が発揮され、円滑な施設操作が図られるよう、平常時から巡視・点検等を行い適正な管理に努めるとともに、ライフサイクルコストの縮減も検討し長寿命化に繋がるよう計画的に補修を行い、各施設の機能を良好な状態に維持していくこととしている。

表-9.3 矢部川 国河川管理施設数

樋門樋管	水門	排水機場	堰	陸閘門
33	1	2	4	17

### 9-3 河道内植生

矢部川の河川区域内の植生については、植生の有する治水機能・環境機能を十分に考慮して、定期的に調査・点検を行い、適切に管理している。

特に船小屋上流部の河道内樹木は、藩政時代の堤防強化のために植栽されたもので、矢部川中流部の原風景となっている。また、当該区間はゲンジボタルの発生地としても有名であり、治水と環境の調和を図る方向にて管理している。

## 9-4 水防体制

### 1) 河川情報の概要

矢部川では、流域内にテレメータ雨量観測所6箇所、テレメータ水位観測所8箇所を設置し、迅速に情報収集するとともに、これらのデータを用いて河川の水位予測等を行い、流域住民の防災活動等に活用している。

また、常に河川の状況等を把握するための CCTV カメラ（4箇所）を設置し、事務所ホームページで閲覧可能としている。

【出典：国土交通省ホームページ <http://www.river.go.jp/>】

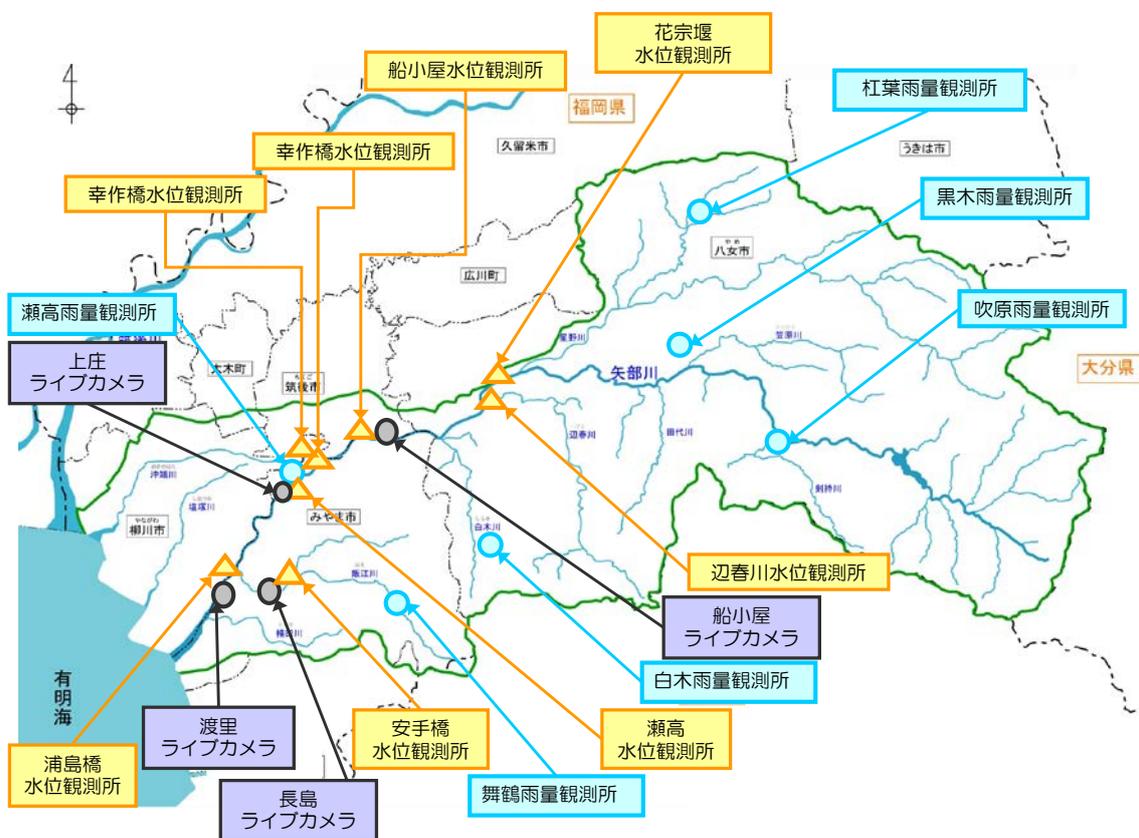


図-9.2 矢部川流域水文観測所位置図

### 2) 水防警報の概要

矢部川では、洪水・高潮による災害が起こる恐れがある場合に、各水位観測所の水位に応じ水防管理者に対し、河川の巡視や災害の発生防止のための水防活動が迅速かつ、的確に行われるよう水防警報を発令している。

### 3) 洪水予報

矢部川は水防法第10条第2項に基づき、洪水予報指定河川となり、「洪水予報」を発表するようになり、福岡管区气象台と共同で洪水予報の発表を行い、流域への適切な情報提供を実施している。水位の状況・水位予測や流域の雨量の状況・予測等をマスコミを通じて一般住民に分かりやすく迅速に情報提供している。

## 9-5 危機管理の取り組み

防災情報の活用、広域防災ネットワーク・情報ネットワークの構築等、ソフト対策の充実を図り、自助・共助・公助が連携した危機管理対策プランを推進するため、水防連絡会、洪水予報連絡会及び出前講座など様々な機会を通じて積極的に情報発信を行っている。



図-9.3 危機管理の取り組み様子

### 1) 事前情報の提供

日頃から水害に備えるための事前情報として、浸水想定区域図をもとに作成する洪水ハザードマップがある。洪水ハザードマップは出水時の円滑かつ迅速な避難の確保を図るためのツールとして、各世帯に配布したり一般へ周知することで、自分の住んでいる地域がはん濫等により、どのような浸水被害を受けるのか認識を深めることができ、また、緊急時の水防、避難活動等にも活用されている。

#### ●浸水想定区域図

水防法の規定により河川がはん濫した場合に想定される浸水の状況を、シミュレーションにより求めたものを記載した地図である。

矢部川においては、平成14年に矢部川本川の浸水想定区域図を作成している。

#### ●洪水ハザードマップ

浸水想定区域図を基にして、浸水・はん濫情報等に避難場所、避難経路の位置、情報入手先などの各種防災情報を具体的に表示した地図で、市町村が作成している。

#### ●水防情報図

洪水時に重点的に巡視点検が必要な箇所など河川管理者や水防管理者（市町村）、水防団・消防団等、水防関係者の水防活動に役に立つ情報を載せた地図である。

矢部川水系では国管理区間について作成し、更新している。

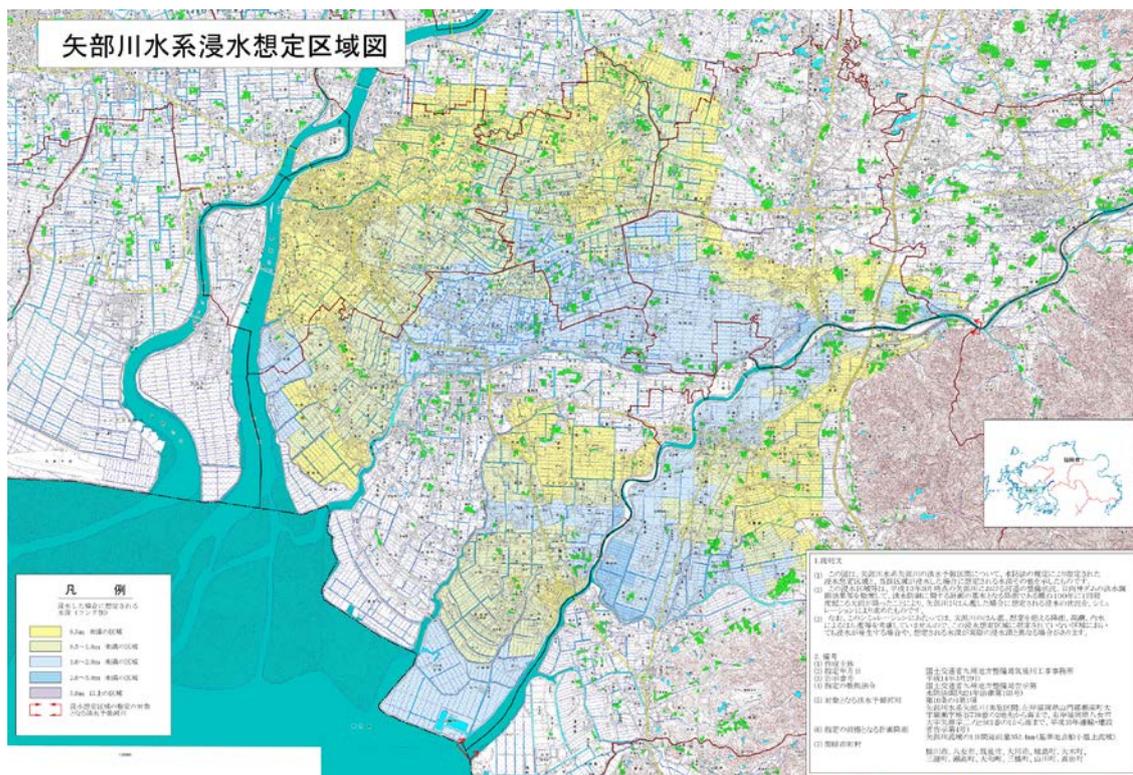


図-9.4 矢部川水系浸水想定区域図

筑後川河川事務所ホームページ

※[http://www.qsr.mlit.go.jp/chikugo/bousai/03-sinsui/sinsui\\_soutei/index.html](http://www.qsr.mlit.go.jp/chikugo/bousai/03-sinsui/sinsui_soutei/index.html)

## 2) 災害時の被害を軽減させる方策

矢部川下流部は低平地であるため計画規模を上回る洪水や高潮が発生した場合、被害は甚大となる。このような災害に備えるためには、ソフト対策の充実の他、現存する治水施設の有効活用や治水機能の維持も重要であると考えられる。

河川堤防の管理用道路等は浸水域より高い位置にあるため、洪水時には、緊急輸送路・避難路としても利用可能であり、河川堤防と主要地方道などと円滑なネットワークを構築することで大規模災害発生時において被害を最小限にすることも可能となる。

沖端川との分派地点で福岡県が整備を進めている筑後広域公園においては二線堤を活かした遊水機能が既に存在しているため、公園計画では浸水を踏まえた計画とされており、引き続き二線堤を含めて一体管理されるよう取り組まれている。



図-9.5 二線堤の事例（矢部川派川沖端川における遊水機能：筑後広域公園）

### 3) 災害発生時の自治体への支援

自治体が管理する河川等において、大規模な災害等が発生又は発生する恐れがある場合には、必要に応じて災害対策用機器等の資機材や職員を派遣し、迅速に情報を収集・提供し、また応急復旧等を緊急的に実施する場合には、必要に応じて応急復旧資材を提供するなどの支援を行うこととしている。また、県の範囲を超えた大規模な災害等にも適切に対応するため、広域的な視点から各県の防災計画の策定等にあたって、積極的に参画、協力することとしている。



図-9.6 防災ヘリコプター（はるかぜ）から土砂災害箇所の調査

## 第10章 地域との連携

矢部川は、市街地を貫流し、流域住民のいこいの場として愛されており、地元住民の矢部川に対する想いは大きく、かつ市街部における貴重な水と緑のオープンスペースとして地域住民のニーズが高い状況にある。一方で、洪水による浸水被害への意識も高まっている。

矢部川では河川に関する情報を、流域住民に幅広く提供、共有すること等により、河川と流域住民とのつながりや流域連携の促進及び支援、河川愛護精神の醸成、環境教育の支援並びに住民参加による河川管理を推進している。